

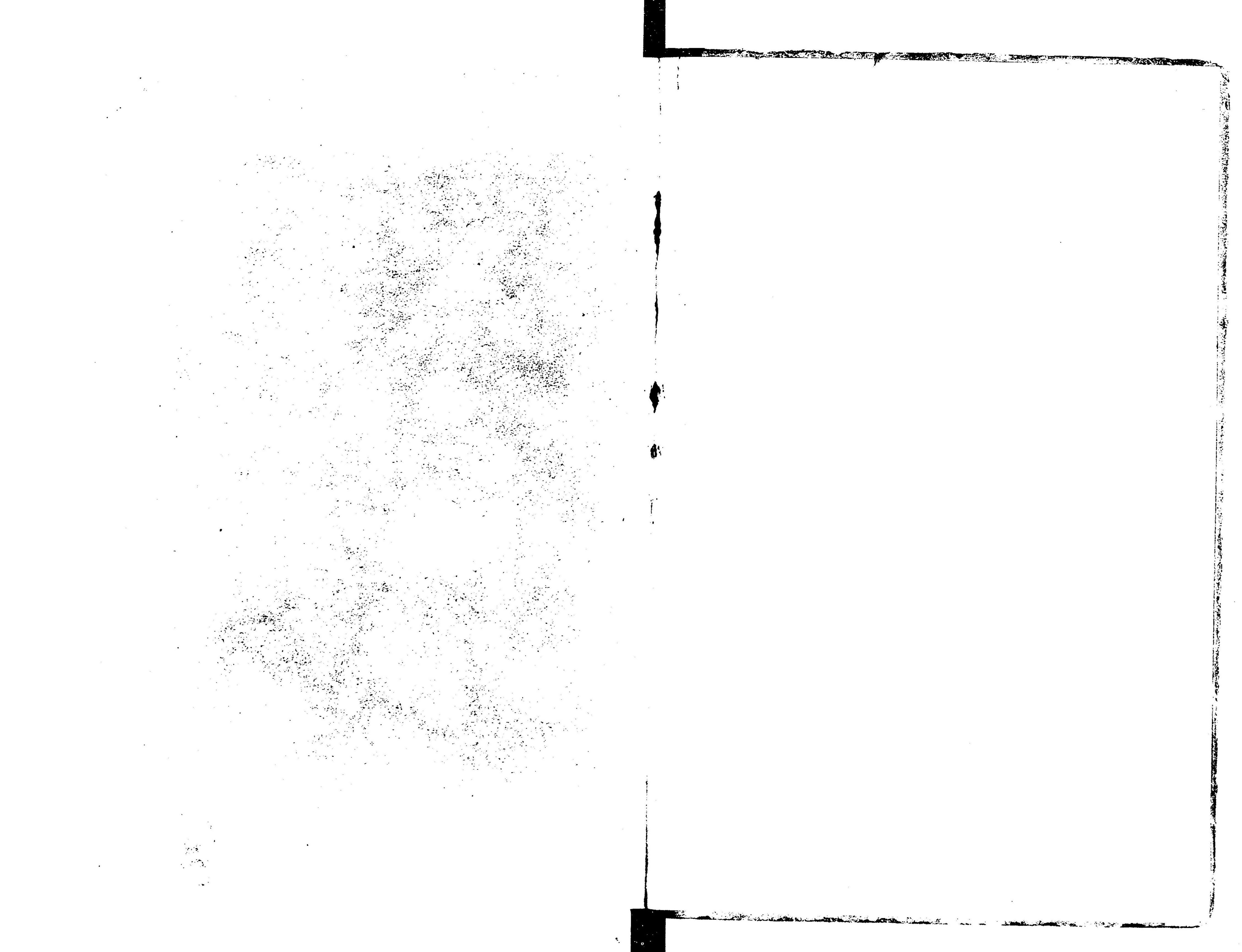
明治
建白沿革史
全

後藤伯題字
戸田十畝著

東京書肆

顔玉堂藏

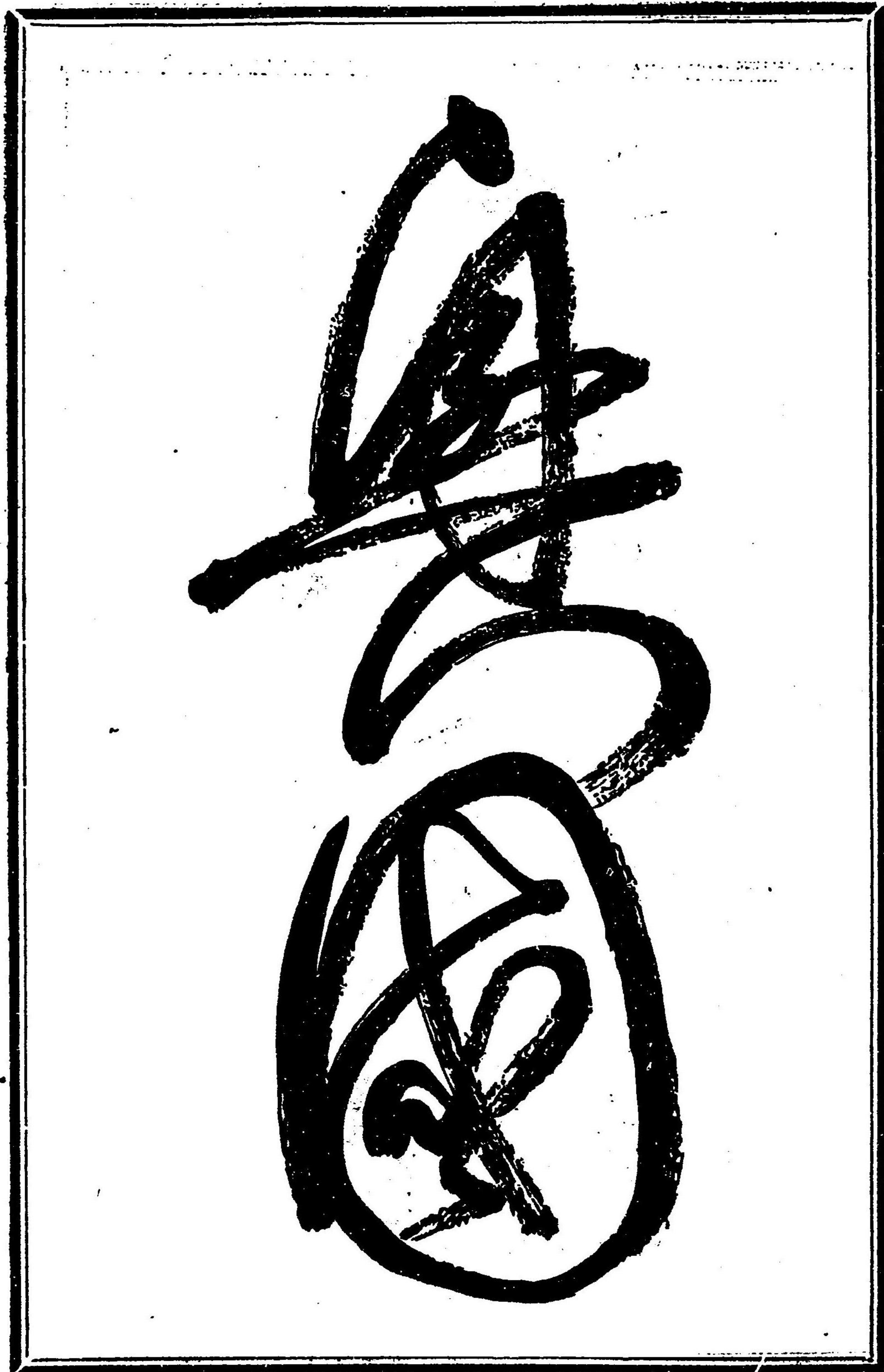
312.1
To364m
II



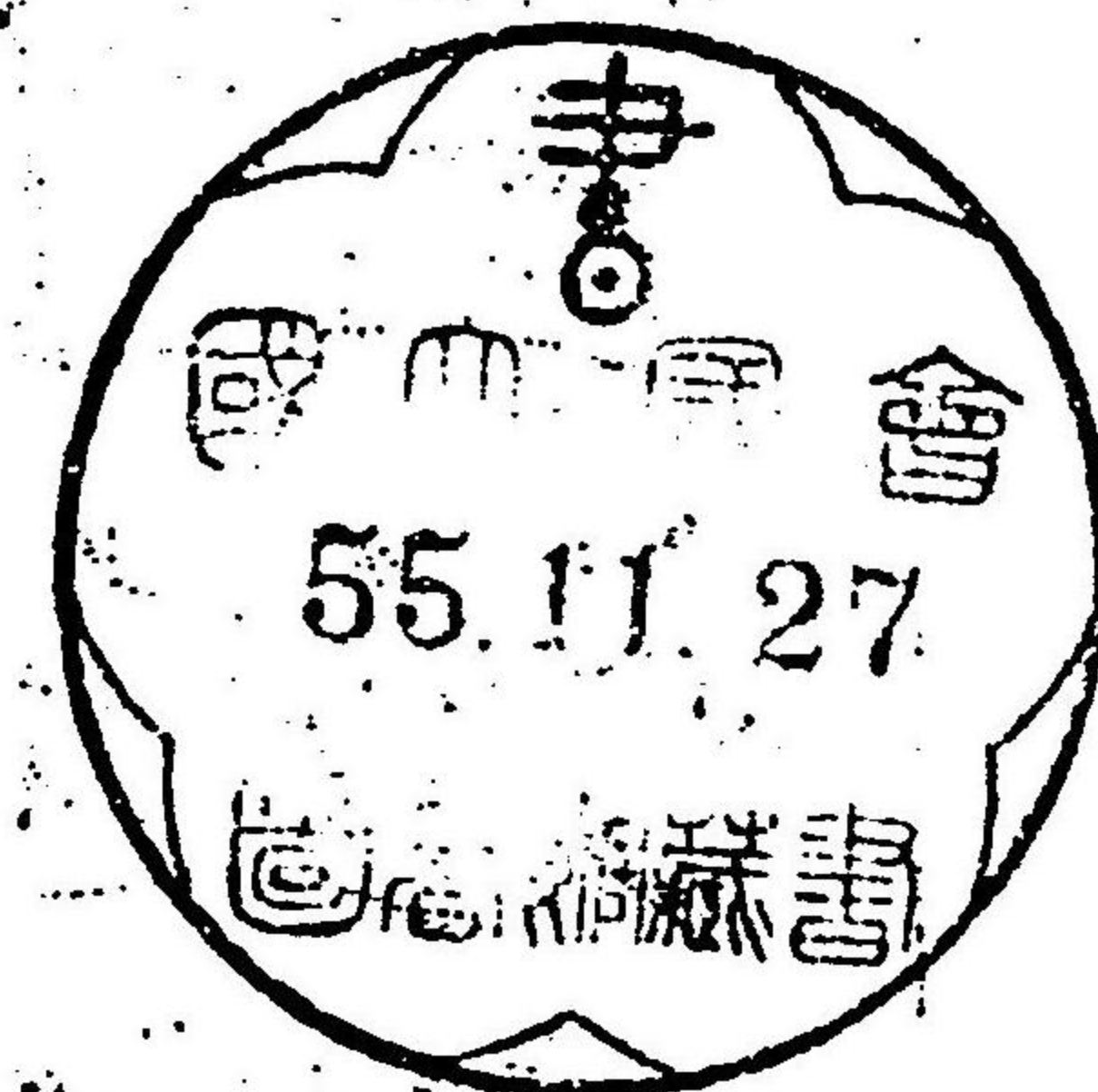
後藤伯題字
戸田十畝著

明治建白沿革史全

東京書肆 顏玉堂發兌



312.1
To 364m
II

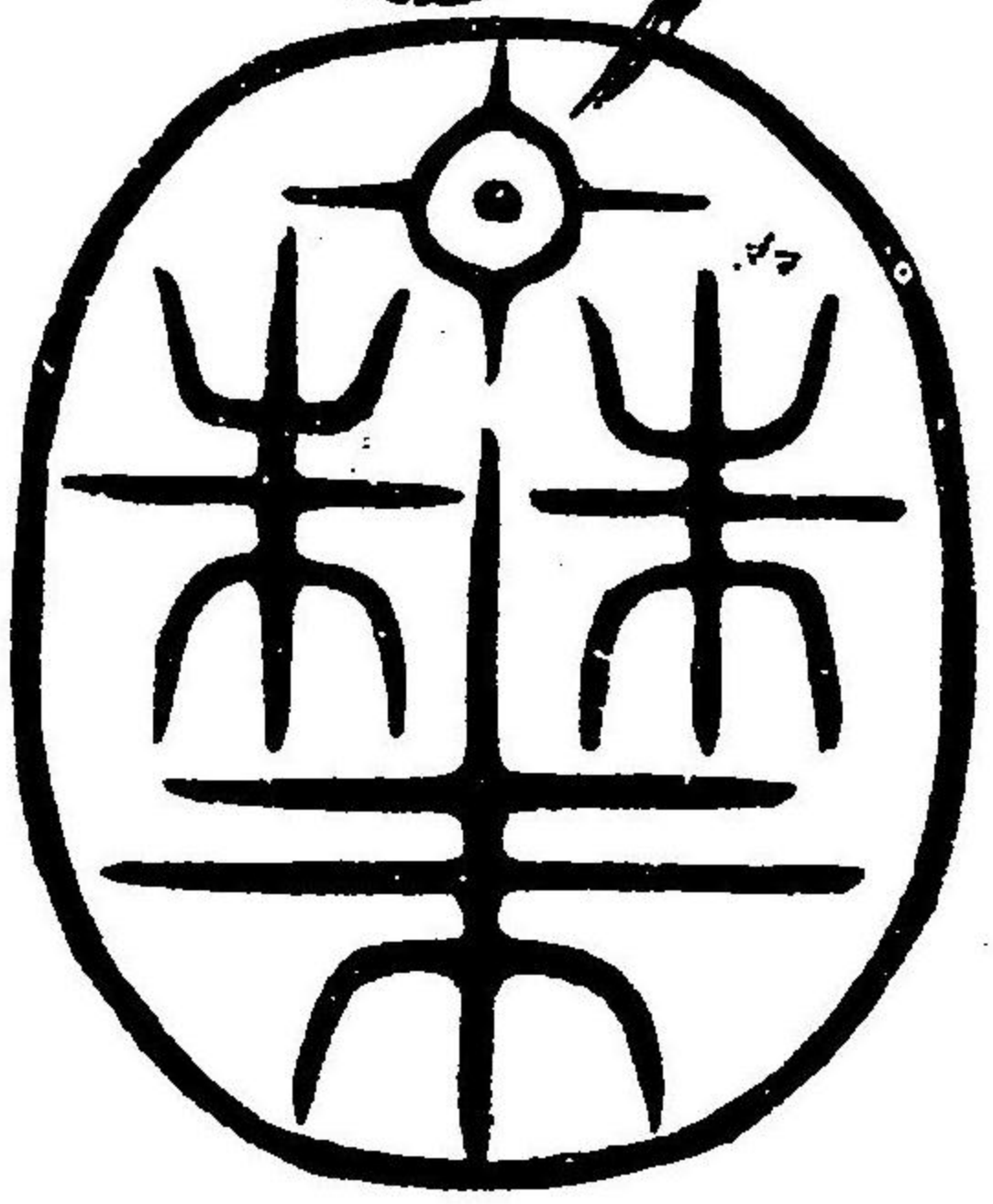


80W56300

高麗

丁亥年

芝海



緒言

予近日政事海上波瀾ノ激スルニ由リ之レガ觀察ヲ爲サン
ト欲シ東京ニ停ルヲ茲ニ四十有餘日。其聞ク所。其視ル所。或
ハ陛下ニ上書シ或ハ元老院ニ建白スル等相集レバ板垣。
勝。谷等諸君ノ意見ヲ談シ相會スレバ減稅。勤儉。言論集會ノ
自由。外交ノ失計ヲ議ス人民ノ政事思想ニ富ム未ダ曾テ今
日ノ如キハアラザル可シ平素相睥睨シテ互ニ主義ヲ争フ
ノ黨派モ今ハ其主義ヲ問ハズシテ今日ノ急務ヲ論ズルニ
至ル夫レ斯クノ如ク政論ノ熾盛ナルヲ以テ中ニハ法律ヲ
誤解シ政府ノ針路ヲ察セズシテ陛下ニ直奏セントテ宮
内省ニ詣ルアリ内閣總理大臣ニ建議セントスルアリ各大
臣ノ邸宅ヲ叩キテ抗論スルアリ其末終ニ法網ニ觸ルニ

至ル者蓋シ妙ナシトセズ是レ畢竟上書建白請願ニ關スル
 政府針路ノ沿革ヲ知ラズシテ茲ニ至ルモノナレバ其疎暴
 ハ聊カ尤ム可キモ其過チヤ氣ノ毒ナリ予偶々維新ノ前後
 ヨリ今日ニ至ルマデノ上書建白請願ニ關スル沿革ヲ蒐輯
 著述セシモノアリ世ヲ益スルニハ足ラズト雖モ幾分カ建
 白者ノ參考トモナル可キノ感ヲ起シ書肆ト謀リテ今印刷
 ニ付シ世ニ公ケニス然レドモ新聞紙出版ノ二條例アリ其
 詳細ヲ載スルヲ能ハザルヲ以テ讀者隔靴搔痒ノ思ヒナキ
 ニ非ザル可シ請フ恕セヨ請フ察セヨ于時明治二十年十一
 月九日東京ニ於テ著者識ス

明治建白沿革史

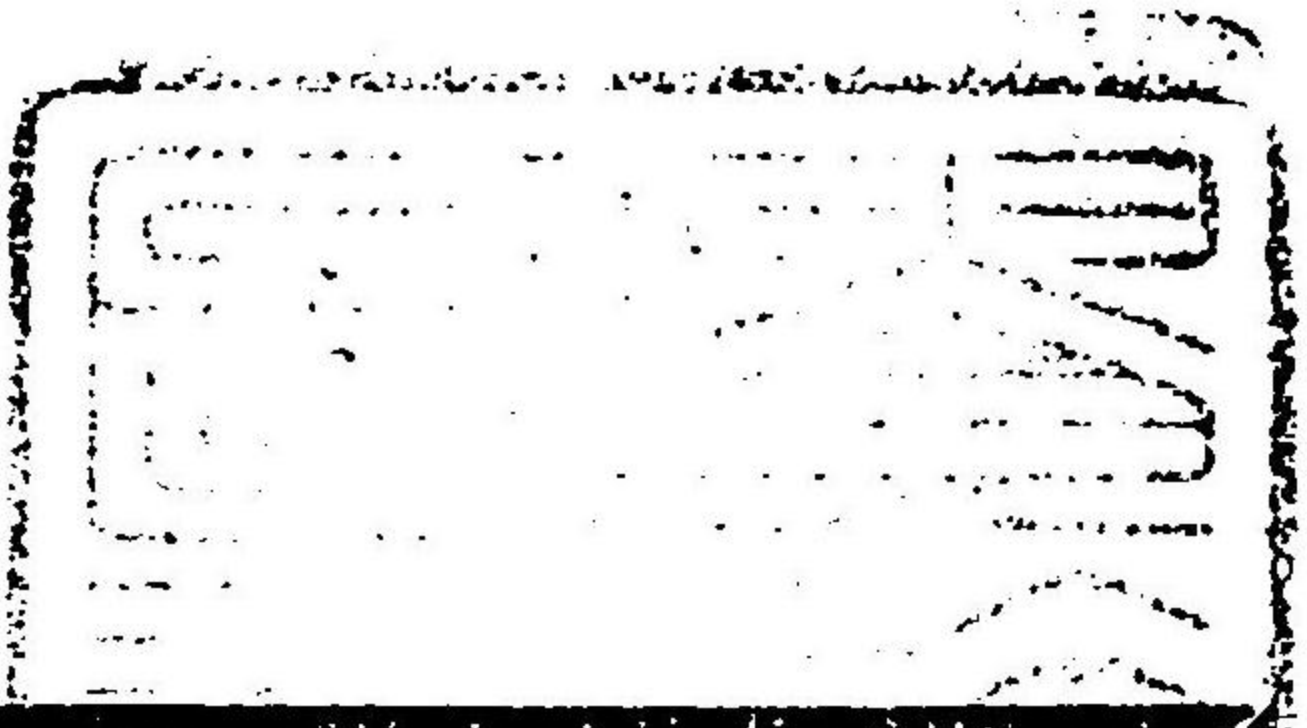
○目錄

○第一編

一上書建白ニ關スル政府ノ針路

總論

- 一慶應三年十二月廿五日ノ布告 三
- 一外國交際ノ事ニ關シ人民ニ憚ナク詳論 四
- 一極諫セシム 八
- 一五箇條ノ御誓文 一
- 一目安箱 一
- 一公議所 一四
- 一待詔局ヲ置キ草莽卑賤ノ者ニ建白ヲ促ス 一四



一待詔院ヲ集議院ニ合ス	一八
一集議院ヲ廢シ左院ニ合ス	一九
一左院ヲ廢シテ元老院ヲ置カル	二七
一明治十三年第五十三號布告	三一
一國會開設ノ大詔	三三
一請願規則	三五
一建白ニ關スル二十年九月內務省令第二	四二
號	
一內閣總理大臣ノ訓示	四三
一上書建白ヲ世ニ公ケニス	五四
一上書建白ヲ世ニ公ケニスルヲ禁ス	五五
一沿革ノ約言	六一

○第二編

一上書建白請願ニ關スル民間ノ動作	六五
一總論	六八
一維新ノ大業輿論ニテ成ル	七一
一維新業成テ一時建議スルモノヲ減ズ	七四
一横山正太郎ノ諫死	七六
一民選議院設立ノ建白	七九
一八年島津板垣ノ建議	八一
一民選議院設立ノ輿望	八二
一立志社及ヒ靜儉社ノ建白	八三
一國會ヲ開設スル允可ヲ上願スル書	八五
一上書建白ノ効	

一十年ノ減租	八六
一 一身ヲ犠牲トナシテ上書建白哀訴セシ モノ	八七
一 明治十四年以後	九一
一 亦々言論ノ世トナル	九二
一 明治二十年ノ建白	九四

明治建白沿革史目錄畢

明治建白沿革史

戸田十畝著述

○第一編

○上書建白ニ關スル政府ノ針路

上意下ニ通ゼズ下情上ニ達セザルトキハ上ノ施ス所。下情ニ適セズ下ノ欲スル所。上意ニ反ス上下ノ情意ヲ洞通スルノ必要ナル敢テ論ヲ俟タザル所ナリ是レ管ニ文運日新ノ世ニ在リテ然ルノミナラズ草昧未開ノ世ニアリテモ上下ノ情意ヲ洞通スルヲナクシテハ容易ナラザル禍害ヲ起ス。アアルニ至ル可シ我國幕府專横ノ時ニ當リテヤ民ヲ

御スルコト奴隸ノ如ク敢テ人民ノ利害痛痒ヲ感ズルナ
 ク上ノ施ス所。下之レニ啄ヲ容ル、下能ハズ若シモ濟民義
 士アリテ政府ニ上書建白ヲ爲スアレバ或ハ之レヲシテ
 不憚上不屈者ナリト云ヒ或ハ之レヲシテ強訴セリト云ヒ
 非道慘刻ナル刑ニ處スルニ至ル彼ノ義民木内宗五郎、文珠
 九助等ノ輩續々極刑ニ墜リシヲ以テ例ス可シ下情上ニ達
 セズ上意下ニ通ゼズ上ハ聾トナリテ下ヲ御シ下ハ盲啞ト
 ナリテ唯命是從フ此ノ上下ノ情意ヲ壅塞セシ其末ハ盲明
 トナリ啞言ヲ發シ聾耳ヲ破リテ首尾轉倒スルノ大禍ヲ起
 スニ至ルヤ昭々タリ幕府ノ末路。徵シテ以テ知ルニ足ル可
 シ豈ニ謹マザル可ケンヤ之レ管ニ我幕府ノ末路ヲ例スル
 ノミナラス世界萬國皆ナ然ラザルハナキナリ民間人材ナ

慶應三年十
 二月廿五日
 ノ布告

キニアラズ民情悉ク非ナルモノニアラズ有司ハ民間ノ人
 材ヨリ輩出シテ政治ヲ施ス國家ハ民望ノ歸スル所ナリ下
 情ノ上達ヲ壅塞シテ何ゾ其ノ政府ヲ維持スル下能ハンヤ
 國家ノ興廢ハ民望ノ採否如何ニアリ抑壓ノ治。專横ノ政。只
 タ一時ヲ凌グニ過ギズシテ百年ノ計ヲ慮ルモノニハアラ
 ザルナリ
 幕府政權ヲ奉還シテ王政ノ古ニ復スルヤ早既ニ朝廷ハ下
 情ニ悖戾スル下勿ラシクテ慮リ博ク天下ノ公議ヲ取り偏
 黨ノ私ナキヲ以テ衆心ト休戚ヲ同フスルニアレハ列藩ニ
 於テハ心附タル下アラバ忌諱ヲ憚ラズ極言高論シテ救繩
 補正ニ力ヲ盡シ上勤王ノ實効ヲ顯シ下人民ノ心ヲ失ハザ
 ル下ヲ要スベシト布告セラレタリ
 慶應三年十月廿五日故ニ列藩ニ

外國交際ノ
事ニ關シ人
民ニ憚ナク
詳論極諫セ
シム

於テモ此旨ヲ遵奉シ藩士藩民ヲシテ忌諱ナク直言極諫セ
シムルノ自由ヲ與ヘシヨリ茲ニ數百年來壅塞セシ道ヲ開
キテ上下ノ情意ヲ洞通スルニ至リ愈々上下和合ノ基ヲ起
シタリ是ノ時ニ當リ内治ノ要ハ素ヨリ其所ナリト雖モ最
モ困難ヲ極メタルハ外國交際ノ一事ニアリ外國交際ノ一
事ニ於テモ人民ヲシテ詳論極諫セシムルハ最モ必要ナル
モノニテ依テ以テ其道ヲ誤ラザルニ至ル可シ之レヲ暗々
裡ニ左右シテ人民ノ容喙ヲ妨グルモノト比シテ其優劣得
失如何ゾヤ今ノ人之レヲ判斷セバ是非ノ別カル、所自カ
ラ分明ナラン、明治元年二月十七日總裁議定參與ノ三職ハ
外國交際ヲ始メ萬機悉ク御親裁ニ因リ既往將來ヲ論ゼス
忌憚ナク詳論極諫セシムベキトヲ達セラル蓋シ外國交際

ノ事ハ輿論ヲ蒐輯スルノ益少ナカラザルヲ以テノ故ナラ
ン其文意ハ後來讀テ以テ當時ノ政略ヲ窺ヒ知ル可ケレバ
左ニ之レガ全文ヲ掲グルトトナス
外國御應接之儀者上代崇神仲哀御兩朝之頃ヨリ年ヲ逐
テ盛ニ成來リ遠邇ノ各國歸化貢獻有之其後唐國トハ常
々使節相往來或ハ居留シ其交際モ亦自ラ親敷候此時ニ
當リ船艦ノ利未々開ケズ故ニ三韓四近ト唐國而已西洋
各國之事ハ暫ク差置印度地方尙明確ナラズ候然ルニ近
代ニ至リ而者万民所知ノ如ク船艦ノ利航海ノ術其妙ヲ
極メ万里之波濤比隣之如ク相往來シ一時幕府之失錯ト
ハ乍申皇國ノ政府ニ於テ誓約有之候事ハ時ノ得失ニ因
テ其條目ハ可被改候得共其大體ニ至候テハ妄ニ不可動

事萬國普通之公法ニシテ今更於朝廷是ヲ變革セラレ候時
ハ却テ信義ヲ海外各國ニ失ハセラレ實以不容易大事ニ
付不被爲得止於幕府相定置候條約ヲ以御和親御取結ニ
相成候既ニ先般御布令被爲在候上ハ皇國固有ノ御國體
ト萬國之公法トヲ御斟酌御採用ニ相成候者是又不被爲
得止御事ニ候仍而越前宰相以下建白之旨趣ニ基キ廣ク
百官諸藩之公議ニ依リ古今得失ト萬國交際之宜ヲ折衷
セラレ今般外國公使入京參朝被仰付候元來膺懲之舉ハ
萬古不朽之公道ニシテ縱令和親ヲ講スルトモ其曲直ニ
依テ各國不得止之師相起リ候其例不少付テハ攻守ノ覺
悟勿論之事ニ候得共和親之事ハ於先朝既ニ開港被差許
候ニ付皇國ト各國トノ和親爰ニ相始リ居候處其節ハ幕

府へ御委任之儀ニ付諸事交際之儀於幕府取扱來リ候處
此度王政一新萬機從朝廷被仰出候ニ付テハ各國交際之
儀直ニ於朝廷御取扱ニ可相成者元ヨリ之御事ニ候今ヤ
御初政之御時總テ之事件ハ全ク總裁始當職之責ニ有之
候何分某等不肖之身ヲ以テ大任ヲ負荷シ非常多難之時
ニ逢候上ハ深恐懼思慮ヲ加ヘ天下之公論ヲ以テ及奏聞
今般之事件御決定被爲在候且國內未々定ラズ海外萬國
交際之大事有之候得者普天率濱協心戮力共ニ王事ニ勤
勞シ萬國交際ヲ始萬機悉ク既往將來ヲ不論無忌憚詳論
極諫有之度唯急務トスル所ハ時勢ニ應シ活眼ヲ開キ從
前ノ弊習ヲ脱シ聖德ヲ萬國ニ光耀シ天下ヲ富岳之安ニ
置キ列聖在天之神靈ヲ可奉慰上下舉テ此趣意ヲ可奉謹

承候事

此ノ達ハ今日ニ至ルマデ消滅シタルニアラズ故ニ人々此
趣意ヲ奉戴シアリシニ明治二十年九月廿八日内閣總理大
臣伊藤伯カ地方長官ニ訓示シタル第三項ニ依ルトキハ外
交ニ關シテハ人民ノ公議ニ付スルモノニ非ザルヲ示サ
レタリ是レ前後矛盾スルニ似タリト雖決ノ然ラズ今ハ
全ク歐米各國ノ政体ニ依準シテ斯ク訓示セラレタルモノ
ナラン茲ニ維新ノ始メニ於テ降詔サレタル五箇條ノ御誓
文アリ人皆ナ以テ一日モ忘ル、コナカル可ク之レニ對ス
ル總裁公卿諸侯ノ請書モ讀テ人々記憶スルナラン然レド
モ左ニ之レヲ掲グルモ亦々益ナシトハ云フ可カラザル可
シ

五箇條ノ御誓文

五箇條ノ御誓文

- 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
 - 一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
 - 一 官武一途庶民ニ至迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦サラ
シメンコトヲ要ス
 - 一 知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ
 - 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
- 我國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ
天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立テ
ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

戊辰三月

御 諱

勅意宏遠誠ニ以感銘ニ不堪今日ノ急務永世ノ基礎此

他ニ出ヘカラズ臣等謹テ叡旨ヲ奉體シ死ヲ誓ヒ黽勉
從事冀クハ以テ宸襟ヲ安シ奉ラン

總裁 公卿 諸侯

右ノ御誓文中ニ萬機公論ニ決ス可シ上下心ヲ一ニシ各其
志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦サラシメントテ要ス天地ノ公道ニ
基クヘシ等ノ文字ハ皆ナ輿論ヲ採擇セラル、モノニシテ
即チ上下ノ情意洞通シテ心ヲ一ニセント欲セラル、ニア
ルナリ明治八年ニ元老大審ノ二院ヲ置カレシモ明治十四
年ニ國會開設ノ聖詔ヲ發セラレシモ五事ノ御誓文ニ基カ
ザルハナシ僅々此ノ短文ナル五事ノ御誓文ハ憲法ノ大綱
トモ云フベク後日憲法ノ制定アルニ當リテハ素ヨリ御誓
文ノ趣旨ニ依リ言論ヲ自由ニシ以テ上下ノ情意ヲ洞通ス

目安箱

スル如キニ至ラシムベキヤ必セリ只ダ此ノ御誓文ヲ標準
トシテ政治ノ方針ヲ定メラル、トアラバ彼ノ下情ニ悖戾
スル如キトハ決シテアラザル可シ
幕府政治ノ時ヨリシテ目安箱ナルモノアリ人民ノ氣付キ
タルコトハ書面ニ認メテ此ノ箱ニ投シ暗々ノ裡ニ下情ヲ
上達セシムルコト、ナヒリ此ノ箱ニ投ズル書面ニハ姓名
ヲ記スルニ及バズ若シモ姓名ヲ記セズンバ採用スルトナ
シトセバ幕府專横ノ政下ニ一人トシテ投書スルモノナカ
ルベカリシナラン然レドモ姓名ヲ記スルニ及バザルトト
セシヨリ投書ノ數甚ダ多ク下情ヲ採擇セザル幕府モ爲メ
ニ大ニ益セシトアリト謂フ此ノ良法アリ明治政府ニ移ル
モ何ゾ容易ク之レヲ廢スルトアラシヤ之レヲ廢セント欲

セバ之レニ代フルノ法ナクンバアラズ然レモ明治政府ハ
幕府ノ專横ヲ相續セシモノニアラズ故ニ投書ニ姓名ヲ記
スルモ爲メニ法網ニ罹ル如キトナシ且ツ維新後專ヲ人材
ヲ登用スルノ主旨ナルヲ以テ目安箱ニ投書スルモノハ忌
諱ナク姓名ヲ記スベキト達セラル明治元年五月之レ投書ノ所
論精細ニシテ適當ナルモ其ノ誰レノ爲シタルカヲ知ラザ
ルハ遺憾ナリトノ意ナレバナリ然ルニ又ター得アレバ一
失アルトテ免レズ下情ノ上達ヲ計ラレ國事ノ如何ヲ上書
スルタメニ設ケラレタル目安箱モ投書ノ易キガ爲メ或ハ
私怨ヲ以テ人ヲ讒譏シ或ハ己レ罪ヲ犯シナガラ却テ之レ
ヲ他ニ負ハシ或ハ國益ヲ名トシテ一己ノ私利ヲ營マント
スル者等往々少ナカラザルトトナリ所謂玉石混淆シテ採

擇ノ便ナキヨリ政府ハ一令ヲ發シ實意ヲ以テ申出デント
スル者ハ住所姓名ヲ明記シ捺印シテ投函スベシ若シ無名
ノ投書アルニ於テハ封ノ儘ニテ燒捨ルトトセラレタリ明治
二年七月達當時或ハ下情ヲ上達スルノ途ヲ塞ギタリトノ嫌
ナキニアラザリシモ大切ナル目安箱ヲシテ私怨ノ府トナ
シ私利ノ紹介所トナシ戯文ノ集ル所トナルトテ防ガント
スルニハ制限ヲ設クルトナクンバ能フ可カラズ今日ヨリ
シテ之レヲ見ルトキハ誰レカ之レヲ非難スルモノハアラ
ザルベシ踵デ百政緒ニ就キ待詔院ナルモノヲ置キ集議院
ナルモノヲ置カレシヨリ上書建白ヲ呈スベキ官衙ヲ設ケ
タルニヨリ今ハ目安箱ノ必要甚ダ少ナク明治六年六月十日
九十九號之レヲ廢シテ上書建白ハ集議院又ハ各地方廳ニ差

如何ヲ親ヒ知ルベキナリ

明治二年三月十二日布告

大政更始以來舊弊一洗言路洞開上下貫徹少モ壅塞無之天下有志之者竭丹誠爲國家無忌憚建言致候ニ付追々御採用相成候得共猶實効之不立廉々有之畢竟御旨趣貫徹不致有志之者選舉ニ相洩候哉ト深ク御煩念被爲在候ニ付此度於東京待詔局被爲開候間有志之者草莽卑賤ニ至迄御爲筋之儀早々建言可致篤ト議論相遂其所長ヲ以夫々御用被仰付御趣意ニ候間向後潛伏隱遁辭々其志ヲ不達者有之候テハ至誠盡忠之素志ニ相悖リ候間尙上下一致偏ニ盡力可致旨被仰出候事

明治二年四月廿五日布告

皇國基礎御確定之會議被仰出候ニ付爲國家存付有之族ヲハ不願卑賤待詔局へ罷出無忌憚可致建言事

明治二年五月九日布告

先般待詔局被爲開草莽卑賤之者ニ至ルマデ御爲ノ筋之儀獻言致シ候様御布令相成候ニ付追々存付申出候就テハ重大之事件ハ上裁ヲ經夫々御取捨相成候ヘドモ各官府縣限リニテ可否決定可相成程ノ事件申出候族ハ待詔局ニ於テ一應尋問ノ上爲証據局印ヲ押其官及府縣へ向當人差越書面爲差出候間其事之可否得失ニヨリ取捨可致ハ勿論假令即今採用難相成申出候モ懇切ニ說諭ヲ加ヘ言路洞開下情壅塞無之様ト御旨趣致貫徹候様可取計旨被仰出候事

今ノ人右ノ三布告ヲ讀テ如何ナル感想ヲ起スベキカ予ハ
 實ニ斯クノ如キ布告ハ永世ニ行ハレタク思フナリ然ルニ
 予ノ思想ハ果シテ時ニ協ハザルモノナルカ金玉トモ思ヒ
 タリシ右ノ三布告ハ早晚シカ消ヘテ非現行トナリタルコ
 ソ遺憾ナレ是レ蓋シ集議院及左院等ニテ建白書受付規則
 ヲ發セラレ元老院ニ於テ建白書受付規則ヲ發セラレタル
 等ノタメ往々勢力ヲ失シ終ニ明治十三年第五十三號布告
 ヲ發セラレ明治十五年ニ請願規則ヲ發セラル、ニ至テ愈
 ヲ三布告ノ趣意ヲ貫ク丁能ハザルニ至リタリ亦々時勢ノ
 然ラシムル所ナル哉

待詔院ヲ集
 議院ニ合ス

明治二年八月十五日待詔院ヲ集議院ニ合併ス其二十日ヲ
 以テ建白ハ集議院ニ差出ス可キトヲ布告ス然レドモ此ノ

集議院ヲ廢
 シ左院ニ合
 ス

合併ノ爲メニ未ダ三布告ノ趣旨ヲ枉セラレタルニアラズ
 却テ從前ニ異ナルトナカラシメン爲メ故ヲニ其意ヲ達セ
 ラレタリ後チ太政官中ニ左院ヲ置キ明治四年七月集議院ヲ
 シテ左院ノ被管トナシタリ明治四年八月廿日明治六年六月廿五日
 集議院ヲ廢シ同院從前ノ事務ハ左院ニ於テ取扱フトヲ布
 告ス第十八號是ヨリ先キ集議院ハ建白書受付規則十四ヶ
 條ヲ定メ諸省ニ廻達シ明治五年七月左院亦々之レヲ改正セ
 リ然レドモ却テ改正セシモノヲ以テ建白者ニ便チ與ヘラ
 レタルモノアルガ如シ明治七年五月此ノ受付規則ナルモ
 ノハ左院ヲ廢セラレタルト共ニ消滅シタルモノナレドモ
 後日ノ參考トモナル可キモノナレバ左ニ之ヲ掲グ

左院分局建白所

揭示

第一條 建白書ハ休日ノ外毎日午前九時ヨリ午後一時迄ニ差出スベシ

第二條 建白書ハ正副二本ヲ差出スベシ且ツ本人ノ本貫族姓名年齢職業住所ヲ洩ナク誌スベシ

第三條 建白書ハ固ヨリ一己ノ意見ヲ述ル者ト雖_レ或ハ同意タルヲ以テ不得已數人連名_ニテ差出スモノハ不苦然_レ五人以上直ニ出頭スルヲ許サズ但遠地ノ者代人或ハ郵便ヲ以テ差出スヲ得ベシ郵便送致ノモノハ上封面ニ左院建白所御中ト書スベシ

建白書受付規則

第一條 建白書受取ハ左院分局ニ於テ休日ノ外毎日午

前九時ヨリ午後第一時ノ内ニ受取ベシ

第二條 建白書ニハ建白人ノ本貫屬族姓名年齢職業住所ヲ洩ナク誌シテ差出サシムベシ

第三條 建白書ハ必ズ正副二本ヲ差出サシムベシ二本備ハル者ニ非ザレバ受取ベカラズ

第四條 建白受付掛リハ書記生交番ニテ之ヲ勤ムベシ

第五條 建白書ヲ受取タル書記生ハ第二條第三條ノ規則ニ合ヤ否ヤヲ檢シ其建白ノ要領ヲ取り之ガ標目ヲ作リ別記ニ爲シ正本ト共ニ掛リノ書記官ニ差出スベシ尤モ副本ハ本院ニ留テ追檢ニ備フベシ正副本トモ其表紙ニ受取タル書記生ノ姓名及ビ年月日並ニ番號ヲ朱書スベシ

第六條 建白ノ正本及ビ其標目ヲ受取タル掛リノ書記官ハ一應之レヲ檢査シテ其事ノ類ニ應ジ主務ノ各課ニ分配スベシ各課ノ議官之ヲ檢閱シ其事由ヲ講究商確シ上覽ヲ請フベキモノ或ハ官省ニ付シ或ハ其答議ヲ受クベキモノ或ハ本人ヲ呼出シ反覆審議スベキモノ又其建議ノ立意世上ニ流布セシメ新聞紙ニ載出スベキモノ或ハ事理適切ニシテ其裁ヲ乞フベキモノ方策アリテ參考ニ備フベキモノ又ハ之ヲ留置テ地方官會議ニ付スベキモノ各其緩急取捨ノ案ヲ立テ議長ノ決ヲ取ルベシ但シ上旨ヲ受ル者及答議ヲ受クル者ハ本人ヲ呼出シ能ク其然ル所以ヲ申明シ之レヲシテ能ク其趣意ヲ奉體セシムベシ

第七條 凡建白書國家ノ大事ニ關涉シ其事理明允ニレテ上覽ヲ乞フベキ程ノ者及ヒ總會議ヲ經ベキ者等ハ之ヲ議長ニ出シ議長臨時總會議ヲ開キ之ヲ討論審明シ衆議上覽ヲ乞フベシトセバ更ニ其議ヲ添ヘ議長ヨリ大臣ニ乞フテ之ヲ奏スベシ但シ事柄ニ因リ總會議ヲ經ルニ及バザル者ハ各課議案ノ儘ニテ上覽ヲ乞フテモアルベシ

第八條 建白書國家ノ大事ニ關涉スト雖モ上覽ヲ乞フニ不及者ハ衆議或ハ一課ノ議ヲ添ヘ大臣ニ出スベシ

第九條 凡租稅及ヒ民事上ニ關涉スル建白書ハ一切取束テ地方官會議ヲ待テ之ニ付スベシ但シ至急ノ事柄ニテ地方官會議ヲ俟ツ能ハザル者ハ此限ニアラズ

第十條 建白人ヲ分局ニ呼出ス時ハ各課主務ノ議官二人ニテ應接スベシ其審問ノ際双方事理ヲ申明スルヲ旨トシ可否討論ヲ要セズ側ニ掛リノ書記官書記生出席シ議官ト建白人トノ應接論辨ヲ逐一筆記スベシ

第十一條 凡ソ建白書審問答議ニモ及バズト雖モ忠實愛國ノ真情ヲ見ルニ足ルモノハ其志ヲ嘉賞シ院中ニ留置クベシ

第十二條 建白書而甚不適當ナルモノハ之ヲ差返スベシ或ハ惑誤ニ出ルモノハ之ヲ曉諭スベシ皆本人ヲシテ能ク其意ヲ了解セシムルヲ要トス但シ書面ヲ差返シ或ハ曉諭スル等ハ各課主務ノ議官必ズ之ニ應接スベシ

第十三條 左ノケ條ニ觸ル、者ハ之ヲ差返スベシ

第一 天皇陛下ヘ對シ奉リ不敬ノ言アル者但シ皇廟並ニ皇后宮皇子親王等ニ不敬ノ言アルモ之ニ準ズ

第二 妄リニ政府ヲ誹譏シ以テ人ヲ誣告スルノ言或ハ人ノ罪狀ヲ鳴ラス言アル者

第三 言訴訟ニ亘ル者但シ之ヲ差返ス時ハ必ズ常人ヲ呼出シ其然ル所以ヲ懇切ニ說諭スベシ懇切數回ニ及ビ尙公理ニ服セズ我意ヲ以テ暴抗スル者ハ司法省ニ送リ照律ヲ乞フベシ若シ狂氣亂心ノ者ハ其住居戸長ヲ呼出シ之ニ責付スベシ

第十四條 本院ハ行政ノ衙門ニ非ズ故ニ假令面談ノ議官ニテ其建白ノ旨趣ヲ善ト稱スルモ本人ニ對シ其採用ノ有無ヲ達スルヲ得ズ

第十五條 各省へ送付シ或ハ各課ノ廻議ニ付シ或ハ其日ヲ指シ本人ヲ呼出シ或ハ其要旨ヲ採テ新聞紙ニ載出スル等ノ手續ハ一切掛リノ書記官ニテ之ヲ掌理スベシ右ノ受付規則ニ關シテハ別ニ論ズル程ノ事モナシト雖モ其ノ第六條ニ於テ故ラニ世上ニ流布セシメ新聞紙ニ載出スル等ノ明文アルハ至極宜シキヲ得タルモノ、如シト雖モ而モ當時新聞紙ニ上書建白ヲ載スルノ自由ヲ與ヘラレアルガアハ左院ニ於テ故ラニ斯クノ如キ事ヲ受付規則ニ掲ゲズトモ可ナルガ如キモ此ノ明文アルモノハ翌明治八年六月第百十一號ノ布告ニテ新聞紙條例ヲ定メラレ其第十六條ニ於テ上書建白ハ當該官廳ノ許可ヲ得ザレバ掲載スルコトヲ得ズトセラレタルノ豫備ニ出デタルモノナルカ

左院ヲ廢シ
テ元老院ヲ
置カル

上書建白ヲ新聞紙ニ掲載スルノ自由アル時ニハ決シテ斯クノ如キ明文ノ必要ヲ感ズルコトナシ其自由ヲ剝ガレタル今日ニコソ其明文アルヲ以テ幾分か要アルモノナラント思ハル、ナリ然ルニ今ハ其事アルヲ聞カズ眞ニ上書建白ハ世上ニ流布スルコトヲ防ギ秘密ノ部門ニ加ヘラレタリ果シ其政略ノ當ヲ得タルト否トハ予今之レヲ言ハズ

明治八年四月十四日ノ詔書ニ曰ク

朕即位ノ初首トシテ群臣ヲ會シ五事ヲ以テ神明ニ誓ヒ國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ求ム幸ニ祖宗ノ靈ト群臣ノ力トニ頼リ以テ今日ノ小康ヲ得タリ願ニ中興日淺ク内治ノ事當ニ振作更張スベキ者少シトセズ朕今誓文ノ意ヲ擴充シ茲ニ元老院ヲ設ケ以テ立法ノ源ヲ廣メ大審院

院ニ於テ受附セザルヲ以テ若シ誤テ他事ヲ言フ者ハ之ヲ廢棄スベシ

第二條 凡建白書ハ其本貫身分姓名年齢職業住所ヲ誌シ其姓名ノ下ニ實印ヲ捺シ或ハ花押ヲ朱書シ且表紙ニ其書ノ大意ヲ記シ必ズ正副二本ヲ出ス可シ

第三條 凡建白書ハ普通ノ文ヲ用フ可シ外國ノ文ヲ用フ可カラズ若シ外國ノ語ヲ用ヒザルヲ得ザルキハ其譯語ヲ附ス可シ

第四條 凡建白書ハ國ノ爲メ意見ヲ上陳スル者ニシテ固ヨリ乞願書ノ類ニ非ザレバ其取捨ハ別ニ本人ニ告グズ

斯ク立法ニ關スルノ建白ト其他ノ建白トヲ分チ之レガ取

明治十三年
第五十三號
布告

扱ヲ爲スノ官廳ヲ別ニセラレタルノ得失ハ姑ク言ハズト雖是ノ法ハ五ヶ年間依然トシテ變ズルコトナク實行シタリ然レドモ此時ヨリシテ建白セント欲スル者ニ大小ノ不便ヲ與フルヤノ感ヲ起サシメタリキ

維新以來政治上ノ得失利害ニ關シ上書建白ヲ爲スモノ少ナカラザリシモ草莽ノ志士ガ極論建言スル者ハ甚ダ少ナカリシ故ニ明治二年ノ頃ニハ政府却テ建白ヲ爲サシムルコトヲ促シタルコトモアリシガ氣運ノ然ラシムル所カ人文ノ進歩シタル徵ナルカ明治十二三年ノ交ニ於テハ世ニ政治思想ヲ懷ク者頓ニ多キヲ加ヘ或ハ之レヲ演說ニ漏シ或ハ之レヲ文筆ニ訴ヘ或ハ之レヲ政府ニ建白シ或ハ之レヲ天皇陛下ニ上書スル等（事ハ第三編ニアリ）民間ニ政治ノ得失利害ヲ論

ズル者輩出スルニ至リケレバ茲ニ政府ハ一ノ單行法律ヲ
布クコト、ハナセリ

明治十三年十二月九日第五十三號布告

凡ソ人民ノ上書一般ノ公益ニ關スルモノハ何等ノ名目
ヲ以テスルニ拘ハラズ渾テ建白ト爲シ元老院ニ於テ取
扱ヒ候條管轄廳ヲ經由シテ同院ニ差出スベシ此旨布告
候事

於是乎維新以來屢々沿革シ來リシ上書建白ノ史乘ハ此ノ
簡單ナル一布告ヲ以テ悉ク廢滅ニ販シ亦々餘スモノナシ
之レ實ニ現行ノ建白ニ關スル法律ナリ太政官ノ門ハ建白
者ノ市ヲ爲スト謂フニ至リシモ此時ニ在リ此法律ヲ以テ
建白者ガ太政官ニ到ルノ道ヲ塞ギタリト雖モ一方ニテハ

國會開設ノ
大詔

下情ハ在ル所ヲ知ラレタルカ明治十四年十月十二日ニ至
リ國會開設ノ大詔ヲ降サル、トトハナリシナリ

勅諭

朕祖宗二千五百有餘年ノ鴻緒ヲ嗣ギ、中古紐ヲ解クノ乾
綱ヲ振張シ、大政ノ統一ヲ總攬シ、又夙ニ立憲ノ政體ヲ建
テ、後世子孫繼グベキノ業ヲ爲サンコトヲ期ス、嚮ニ、明治
八年、元老院ヲ設ケ、十一年ニ、府縣會ヲ開カシム、此レ皆ナ
漸次基ヲ創メ、序ニ循テ歩ヲ進ムルノ道ニ由ルニ非ザル
ハ莫シ、爾有衆、亦朕ガ心ヲ諒トセン
願ミルニ、立國ノ體、國各宜シキヲ殊ニス、非常ノ事業、實ニ
輕舉ニ便ナラズ、我祖我宗、臨照シテ上ニ在リ、遺烈ヲ掲ケ、
洪模ヲ弘メ、古今ヲ變通シ斷シテ之ヲ行フ、責朕ガ躬ニ在

リ、將ニ明治二十三年ヲ期シ、議員ヲ召シ、國會ヲ開キ、以テ朕ガ初志ヲ成サントス、今在廷臣僚ニ命ジ、假スニ時日ヲ以テシ、經畫ノ責ニ當ラシム、其組織、權限ニ至テハ、朕親ヲ衷ヲ裁シ、時ニ及テ公布スル所アラントス

朕惟フニ、人心進ムニ偏シテ、時會速ナルヲ競フ、浮言相動カシ、竟ニ大計ヲ遺ル、是レ宜シク今ニ及テ、謨訓ヲ明徴シ、以テ朝野臣民ニ公示スベシ、若シ仍ホ故サラニ躁急ヲ爭ヒ、事變ヲ煽シ、國安ヲ害スル者アラバ、處スルニ國典ヲ以テスベシ、特ニ茲ニ言明シ、爾有衆ニ諭ス

建白ニ關シテハ單行ノ法律ヲ布キテ其手續ヲ嚴ニセラレ一方ニテハ國會ヲ開設シテ立憲ノ政體ト爲サントノ勅諭アリシニモ拘ハラズ民間ニ於テハ國會開設ノ期ノ永キヲ

請願規則

厭ヒ短縮セラレシト出願スル者等アリテ今ハ手續ノ不便ナル建白ヲ爲サズシテ天皇陛下ニ請願スル者アルニ至リケレバ政府ハ請願ニ關スル一定ノ規則ヲ定メンタメ請願規則ナルモノヲ發布スルニ至リタリ蓋シ明治十四五年ノ間ニ於テ請願者ノ多キヲ致シタルノ故ナルカ

明治十五年十二月十二日第五十八號布告

請願規則

第一條 人民各自ノ利害ニ關シ行政上ノ處分ヲ請願セントスル者ハ左ノ條規ニ依ルベシ

第二條 郡區長及戶長職權内ノ事件ハ郡區長戶長ニ請願スベシ郡區長戶長ノ指令ニ服セザル者ハ府知事縣令ニ請願シ府知事縣令ノ指令ニ服セザル者ハ主務卿ニ請

願シ主務卿ノ指令ニ服セザル者ハ太政官ニ請願スルヲ得。府知事縣令警視總監職務内ノ事件ハ府知事縣令警視總監ニ請願スベシ府知事縣令警視總監ノ指令ニ服セザル者ハ主務卿ニ請願シ主務卿ノ指令ニ服セザル者ハ太政官ニ請願スルコトヲ得。各省卿職務内ノ事件ハ其卿ニ請願スベシ其指令ニ服セザル者ハ太政官ニ請願スルヲ得。

第三條 凡ソ請願スル者ハ書面ヲ以テスベシ口陳スルトヲ許サズ官署ノ求ニ應ジテ開陳スルハ此限ニ在ラズ

第四條 請願書ハ請願人自ヲ署名捺印シ族籍住所ヲ記シ戶長ニ請願スル者ヲ除クノ外住所戶長ノ奥印ヲ受クベシ其連名ヲ以テ請願スル者ハ各人自ヲ署名捺印シ族

籍住所ヲ記シ其總代又ハ請願發起人アルトキハ其由ヲ肩書スベシ戶長ノ奥印ヲ受クルハ前ノ例ニ同シ

第五條 府縣郡區總代又ハ結社總代ノ名ヲ以テ請願スルトヲ得ズ但成法ニ制定セラレタル會社ハ此限ニ在ラズ

第六條 請願書ヲ上呈スルニハ代人ヲ以テスルコトヲ許サズ數人連名スル者ハ請願人中ニ於テ三名以下ノ總代人ヲ撰ビ之ニ委託スベシ

第七條 請願書ハ郵便ヲ以テ上呈スルコトヲ得

第八條 上司ニ呈スル請願書ニハ其經歷スル所ノ官署ノ指令書ヲ添フベシ

第九條 請願書ノ郵達ヲ得タル各省若シ其主務ニ非ザ

ルトキハ直チニ之ヲ主務省ニ移シ其由ヲ請願人ニ通知スベシ

第十條 太政官ニ於テ請願ヲ裁可スルトキハ主務省ニ付シテ處分セシムベシ

第十一條 太政官ノ裁令ヲ經タル者ハ更ニ請願スルコトヲ得ズ又裁判所ニ訴フルコトヲ得ズ

第十二條 請願ヲ名トシテ行政處分ヲ拒ムコトヲ得ズ凡ソ事ハ建白ニ屬スベキ者ハ人民各自ハ利害ニ係ルヲ以テ請願スト雖モ受理セズ

第十四條 行政處分ノ既ニ五年ヲ經タル者ハ請願ヲ受理セズ

第十五條 請願人第二條ノ順序ヲ經ズ及第三條第四條

第五條第六條第八條第十一條ノ規程ニ循ハザル者ハ受理セズ

第十六條 請願書ニ侮辱誹毀ノ語ヲ用ヒ及ヒ第二條ニ示ス所ノ官署ノ外ニ向ヒ請願スル者ハ受理セズ

第十七條 條規ニ違ヒ受理セラレザルノ請願ヲ以テ強テ受理ヲ請フ者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス

其連名請願スル者ノ情ヲ知ラザル者ヲ除ク外各人均ク罪ヲ論ズ其發起人ハ一月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處ス

若シ請願人ノ外致唆者アルトキハ發起人ト同ク罪ヲ論ズ其嘯聚ニ渉ル者ハ刑法ニ依テ處分ス

第十八條 請願人官吏ニ對シ抗論シ喧擾ニ渉ル者ハ十一日以上一年以下ノ輕禁錮ニ處ス其侮辱ニ渉ル者ハ刑

法ニ依テ處分ス

第十九條 請願書ハ新聞紙其他ノ文書ヲ以テ公行スルコトヲ許サズ犯ス者ハ罪前條第一項ニ同ジ

第二十條 請願ニ由リ人ヲ誣告スル者ハ刑法ニ依テ處分ス

此ノ請願規則ヲ公布セラル依テ以テ政府ニ請願セント欲スルモノハ第一條ノ規則ニ遵ヒ人民各自ノ利害ニ關シ行政上ノ處分ヲ請願スルニアラズンバ能ハズタトヘ人民各自ノ利害ニ係ルモノナリト雖此事ノ建白ニ屬スベキモノハ受理セザルトナレリ故ニ國事ニ關シテ人民ノ利害ヲ請願セント欲スルモ此ノ規則アリテ爲スト能ハズ只ダ其道ハ明治十三年第五十三號布告ナル單行ノ建言ニ關スル

法律ノ僅カニ通ズルトヲ得ルノミ然レドモ凡ソ事物ハ反動ハ壓搾ヲ以テ抑ユベキモノニアラズ一方ヲ抑ユレバ一方ニ膨脹シ一物ヲ投ズレバ其ノ反動甚ダシ人間ノ思想モ之レト異ナラズシテ如何ナル法律アルモ己レノ思想ヲ吐露スルトハ掩フモ能ハザルモノナリ建白ニ關スル單行ノ法律アリ又タ請願規則ノ設ケアルモ人民ノ政事思想ハ益々增長シ明治十九年ニ至リテハ今迄テ眠リタル地方モ外交上ノ感動ヲ起シ長崎ニ於ケル清國水兵ノ暴動ト英船ノルマントン號ノ沈没トニ依リテ俄然睡夢ヲ覺シタルガ如ク到ル處トシテ同胞ヲ憐ムノ情ト國辱ニ關スルトトヲ言ハザルハナク延イテ條約改正會議ノ結果如何ヲ窺フトトハナレリ斯ク人民ガ政事思想ヲ起シタル折柄名望ノ博キ

建白ニ關ス
ル二十年九
月内務省令
第二號

板垣退助ノ上書スルアリ德望高キ農商務大臣谷干城ノ意
見書ヲ呈出スルアリ民間ニ其ノ意見ノ漏聞スルヨリシテ
之レニ贊同スル者四方ニ起リ或ハ上書建白シ或ハ爲メニ
大臣ニ面謁ヲ爲ス等明治二十年八月九月ノ交リヨリシテハ
政治社會ノ運動頗ル活潑ヲ加フルニ至レリ時ニ偶々抗論
喧擾ニ涉ル者ナキニアラズ依テ我内務大臣山形有朋ハ之
レヲ未萌ニ防ガント欲シ省令第二號ヲ發シテ大ニ注意ヲ
促シタリ于時明治二十年九月二十九日ナリ
凡ソ意見ヲ建言シ又ハ各自ノ利害ニ關シ請願スル者ハ
明治十三年第五十三號布告及十五年第五十八號布告ニ
依遵スベキ處近來建言ヲ名トシテ官吏ニ面謁口陳ヲ求
メ從テ抗論喧擾ニ涉ル者アリ右等ハ何等ノ名義ヲ用ニ

内閣總理大
臣ノ訓示

ルニ拘ラズ其違犯者ハ總テ十五年第五十八號布告ニ依
リ處分スベシ
政府ノ注意周到ナルト斯クノ如シ之レト同時ニ内閣總理
大臣伊藤博文ハ地方長官ヲ召集シ訓示スルニ左ノ三項ヲ
以テス

維新以來内治外政百端織ルガ如シ而ノ一ニ皆國本ヲ鞏
固ニシ國權ヲ振起シ人民ノ幸福ヲ進メ永遠ノ基業ヲ建
立シ後世ニ繼グベキノ遺緒ヲ貽サントスルヲ以テ目的
トシ以テ一定ノ進路ヲ取ルニ非ルハナシ是我天皇陛下
ノ夙夜ニ聖慮ヲ焦勞シ中外ノ臣僚ヲシテ奉體服膺シテ
二三ナキヲ期シ以テ今日ニ至ラシメシ所ナリ
願ミルニ八年四月始メテ漸次立憲政體ヲ建ルノ詔旨ヲ

發セラレ元老院及ヒ大審院ヲ設ク十二年ニ始メテ府縣
會ヲ開ク十四年十月ノ詔二十三年ヲ期シ議會ヲ開クノ
旨ヲ宣言ス十八年十二月官制ヲ定ム此レ皆廟謨一定シ
漸ヲ以テ歩ヲ進メ以テ全局ノ成果ヲ期スル者ナリ今ヤ
聖意乾健積久愈々堅ク中興ノ業今日ニ在テ實ニ山ヲ造
ルノ一簣ニ虧ク可ラザルノ時ニ當レリ而シテ民間或ハ
皇猷ノ在ル所ヲ詳ニセズ地方士民危疑ノ念ノ爲ニ其方
嚮ヲ誤ル如キコトアラバ大業ノ累ヲ貽スモ亦少小ナリ
トセズ茲ニ敬テ聖意ヲ奉シ明カニ各員ニ告ルニ内外政
圖ノ標準ヲ以テシ並ニ各員ノ爲メニ施政ノ針路ヲ指示
セントス

第一 我ガ立憲政體ノ大義ハ將サニ立國ノ源ニ基キ祖

宗ノ遺訓ニ遵由シ時ノ宜ヲ酌ミ臣民ノ權利ヲ優重シテ
其公義ヲ伸暢セントス蓋シ皆聖明ノ親ク裁酌ヲ降シ以
テ一國臣民ニ惠賜スル所タラザルハナシ今祖宗以來國
體ノ尊嚴ナルト八年四月及十四年十月ノ聖詔トヲ欽仰
セバ蓋シ他議ヲ待タズシテ其要領ヲ得ルニ難カラザル
ベシ惟フニ各國ニ在テ各其沿革ノ事蹟ニ由テ取ル所ノ
軌轍相同シカラズ從テ各種ノ主義互ニ流派ヲ別チ未ダ
歸一スル所アラズ學說ヲ講ズル者亦各々意見ヲ持シ敷
衍皇張シテ互ニ相讓歩セズ皆一ノ理趣意象アリテ以テ
世人ノ視聽ヲ聳動スルニ足ラザルハナシ而シテ其間理論
相投ズルノ徒漸クニ團結ヲ爲シ互相衝磨スルノ現象ヲ
呈スルトヲ免レザルハ此亦各國往々見ル所ノ情勢ナリ

抑モ我が國ニ於テ上祖宗ノ神器ヲ永遠不侵ノ地ニ置キ
 皇室ノ乾綱ヲ維持シ下臣民ニ向テ代議ノ權利ヲ附與セ
 ントスルハ是レ神祖以來國體ノ大事ニシテ皇家繼述ノ
 宏謨ニ係ル而シテ臣民何人カ敢テ之ヲ私議スルヲ得
 ンヤ今ノ時ニ當リ憲法發布ノ前或ハ后ニ於テ敢テ憲法
 ノ親裁ヲ異議スルモノアラバ斷シテ言論集會及ヒ請願
 ノ自由ノ範圍ノ外ニ出ル者トシ若シ或ハ此ヲ以テ名ト
 シテ暴動ヲ謀リ又ハ欲唆スルモノアラバ治安ヲ維持ス
 ルガ爲ニ臨機必要ナル處分ヲ施スベシ

第二 行政ノ事ハ社會ノ進歩ト俱ニ相併行セザルヲ
 得ズ維新ノ後封建ノ制度ト共ニ社會ノ景況ヲ一變シ凡
 ソ人民生活ノ狀態諸般ノ作業ハ總テ皆ナ更新ノ塗轍ニ

就キ駸々トシテ方ニ進路ノ中間ニアリ其舊ヲ改メテ新
 ニ就クノ際往々停滯シテ疏通セザル者アリ兩々元素互
 ニ相衝突シテ混和ヲ妨グル者アリ而シテ之ヲ監督シ之
 レヲ保護シ其方嚮ヲ指示シテ徐々ニ其結果ヲ収局セン
 トス此レ乃行政ノ事今日ニ在テ非常ノ盤錯ト艱難トヲ
 見ルノ已ムヲ得ザル所以ニシテ而シテ亦方ニ進行ノ中
 途ニアルモノナリ

此時ニ當テ行政ノ責ニ當ル者ハ確實ト永久トヲ以テ目
 的トシ目前ノ近功ヲ貪ラズ人民ト俱ニ敢爲勉強忍耐ノ
 氣風ヲ振作シ其幸福昌榮ヲ進メ完全獨立不羈不侵ノ國
 民タルノ能力ヲ字内ニ證明シ永遠強盛ナル帝國ノ榮譽
 ヲ後世ニ貽サンヲ務ムルノ外豈他アラシヤ而シテ凡

ソ行政ノ事務教育ナリ勸業ナリ土木ナリ經濟ナリ地方
 自治ノ制ナリ諸般ノ營爲ハ總テ皆ナ此ノ一方ニ向テ其
 目的ヲ取り直線前往スルニ外ナラズ此皆我廟猷一定ノ
 規模ニシテ先覺諸臣ノ聖意ヲ遵守シ其心力ヲ盡シテ經
 營措畫シ以テ今日ニ貽シテ終局ノ責ニ當ラシムル所ナ
 リ今ニ於テ若レ一時政論ノ紛擾ニ因リ人民ノ心志ヲ動
 搖スルガ爲ニ或ハ地方ノ事業ヲ弛廢シ二十年經畫ノ行
 政ヲシテ萎靡敗壞ニ歸セシムルヲ免レザルガ如キヤ
 アラバ我國民前途ノ運命ヲ何レノ地ニ置カントスル乎
 各員ハ實ニ直接ニ牧民ノ任ニ當ルモノナリ最モ宜ク意
 ヲ加ヘテ綏撫ノ道ヲ怠ラザルベシ
 方ニ今國運進歩ノ時ニ當リ内外ノ事百般併セ興シ殊ニ

陸海軍務ニ至テハ立國自營ノ道ニ於テ無事ノ時ヲ以テ
 之ヲ一日ノ緩慢ニ付ス可ラズ願ミテ之ヲ宇内ノ大局ト
 國家ノ長計ニ問フキハ我が國民ハ重荷ヲ負擔シ重苦ヲ
 忍耐シテ以テ現在及未來ノ爲メニ國光ヲ維持スルヲ
 務メザルヲ得ズ故ニ人民ヲシテ租稅及ヒ兵役ノ二大
 義務ヲ盡スルヲ怠ラシメズ以テ帝國忠愛ノ臣民タルヲ
 ヲ證明セシメ從テ支費益々精確ヲ務メ無用ヲ省テ有用
 ニ就キ富源ヲ塞ガズシテ以テ要需ノ急ニ應ズルハ即チ
 我政府ノ取ラントヲ願フノ針路ナリ各員宜シク此意ヲ
 體シテ人民ノ爲ニ正當ノ方嚮ヲ指揮スルヲ誤ラザル
 ベク亦宜ク意ヲ加ヘテ休養ノ道ヲ侵害セザルヲ務ム
 ベキナリ

第三 四年岩倉大使ヲ派遣セラレシ以來我條約改正ノ目的ハ一定シテ動カズ屢々時機ヲ以テ結果ヲ得ントヲ試ミタリ曩キニ訂盟各國ト各々委員ヲ命シ商議セシモ未ダ局ヲ結ブニ至ラズシテ我政府ヨリ延期ヲ宣告シタルハ不幸ニシテ彼我所見未ダ一致ノ點ニ歸セザル者アルニ由ル蓋條約ノ事ハ國ノ内外ニ於テ重要ノ關係ヲ有スルヲ以テ政府ハ之ヲ反覆慎重シ以テ將來國運ノ爲ニ追フ可ラザルノ悔ヲ遺ストヲ避ケザル可ラズ但現行治外法權ノ約款ヲ改メテ新ニ列國ノ間ニ平衡ノ交際ヲ締ビ彼我ノ便益ヲ増進セントスルノ目的ニ至リテハ仍一定不變ノ軌道ヲ執リ而シテ將來之ヲ遂行セントスルハ偏ニ我國內治法律ノ進歩完成ニ依頼セザルヲ得ズ此レ

即チ前後緩急ノ間操縱宜シキニ從フノ已ムヲ得ザルニ出ルモノナリ若シ乃外交ノ事ヲ以テ之ヲ人民ノ公議ニ付セントスルノ說アルニ至テハ凡ソ立憲王國ニ於テ斷ジテ取ラザル所ナリ蓋兵馬及交際ノ大權ハ皆ナ帝王ノ躬親ヲ總攬スル所ニシテ或ル場合ヲ除クノ外肯テ之ヲ臣民ノ公議ニ謀ルモノニアラズ若シ宣戰講和盟約ノ權ヲ舉テ之ヲ公衆ニ委ヌルガ如キトアラバ帝王主權ノ存スル所果シテ何クニカ在ル乎此即チ我ガ國立權ノ主義ニ於テ斷ジテ之ヲ拒否セザルトヲ得ズ此亦各員ノ宜ク之ヲ體知シテ人民ノ爲ニ方嚮ヲ指示スベキ所ナリ其他政府ハ總テ聖詔ニ欽遵シ凡立權設備ノ要務ニ屬スルモノハ逐次舉行スルトヲ怠ラズ百般ノ事益々整肅着

實ノ路ニ就キ以テ行政ノ機關ヲ弛緩敗壞ノ弊失ナ
 カラシメントヲ期セントス各員ニ在テ亦必ズ聖明ノ盛
 旨ヲ奉體シ從前既定ノ針路ヲ誤ラズ始アリ終アリ以テ
 分憂ノ責ニ對ヘ以テ中興ノ大業ヲ垂成ノ際ニ翼賛スル
 ノ光榮ヲ完クスルコトヲ怠ラザルベシ
 右ハ内閣總理大臣ガ各地方長官ニ訓示セラレタルモノナ
 レバ民間ニ知ル者アラザリシニ時事新報ガ允許ヲ得テ其
 紙上ニ掲載シタルヨリ人皆ナ之レヲ知ルトナリ種々啄
 ヲ容ル、者アルニ至ル横文新聞ニ於テモ「ガゼット」ノ如キ
 ハ口ヲ極メテ之レヲ駁撃シ「メール」ノ如キハ訓示ノ當ヲ失
 セザルヲ辨護セリ予ハ今茲ニ之レガ是非ヲ論ズルヲ
 爲サズ蓋レ本書著述ノ本旨ニアラザレバナリ然レドモ此

ハ訓示ヲシテ二十年前又ハ十七八年前ニ政府ノ執リシ針
 路ト比較シ且ツ歐米各國ニ於テ議院ガ憲法ニ對スルノ權
 限ト外交上ニ關シ立憲王國ノ議院ガ之レヲ議シ之レヲ決
 スルノ實況ヲ示スト等ハ沿革史ニ必要ノモノナレドモ予
 ハ步ヲ枉グテ是レヲシモ論ズルトナク憲法制定ト外交政
 策トニ關シ政府ガ執ル所ノ針路ニ於テ世人ガ其前後ヲ比
 較シ見ルニ於テハ強チ海外各國ノ例ヲ蒐輯セズトモ其是
 非得失ヲ判別スルコトハ殊ニ易ヤナランノミ亦タ敢テ予ノ
 言ヲ俟タズ
 我國慶應三年以來明治二十年十月ニ至ルマデ上書建白ニ
 關スルノ沿革ト政府執ル所ノ針路トハ既ニ述ベシ所ヲ以
 テ粗ホ其要ヲ知ルニ足ル可シ故ニ是レヨリシテ予ハ上書

建白ヲ世ニ公ケニスルト世ニ知ラシメザルトニ付キ政府
針路ノ沿革ヲ摘採セント欲ス抑モ維新ノ初メニ當リ政府
ハ萬機公論ニ執ルヲ眼目トセラレシ大旨ナレバ外國交際
ヲ始メ其它モ悉ク民間ノ意見ヲ聞カント欲シ特ニ待詔局
ナルモノヲ置キテ草莽卑賤ノ者ト雖モ上書建白スベキヲ
ヲ促サレタル程ノ事ナレバ之レヲ世ニ公ニシテ爲メニ却
テ志士ノ上書建白ヲ誘起セラル、ヤ素ヨリ其所ナリ故ニ
公ケニスルヲ妨グル如キ法律ヲ布カレタルニアラズ明
治六年左院建白書受付規則ノ第六條ニ於テ建議ノ立意世
上ニ流布セシメ新聞紙ニ載出スベキモハナル文ヲ載セラ
レタリト雖モ一方ニテ世上ニ流布スルヲ禁ゼラレタル
ガ爲メニ然ルニアラズ上書建白ヲ世ニ公ニスルノ自由ハ

アレドモ殊更ニ政府ヨリ世上ニ流布セシメンヲ示サレ
タルニ過ギザルノミ明治二年出版條例ヲ布告セラレ明治
五年文部省ハ出版條例ヲ布達シ明治六年新聞紙條目ヲ布
告セラレ（十月十九日第
三百五十二號）タリト雖モ上書建白ヲ新聞紙ニ掲
載スルヲ禁ズルノ明文ナク圖書出版ニモ此ノ例ナレ故
ニ副島種臣板垣退助後藤象次郎等ノ民撰議院設立建白。并
上馨澁澤榮一ノ歲入出ニ關スル建白等新聞紙ニ掲載シテ
大ニ世論ヲ惹起タルナリ然ルニ出版條例ハ明治八年ニ改
正布告セラル、モ（九月三日第
百三十五號）明治十六年ニ至ル迄ハ依然
圖書ヲ以テ世ニ公ニスルノ自由ヲ得タリキ
明治八年新聞紙條目ヲ廢シ新聞紙條例ヲ制定布告セラル
（六月二十八日）其第十六條ニ左ノ明文アリ

院省使廳ノ許可ヲ經ズシテ上書建白ヲ載スルヲ得ズ
 犯ス者ハ罰前條ニ同シ〔禁獄一月以上一年以下罰金百圓以上五百圓以下〕
 於是乎新聞紙ニハ上書建白ヲ掲載スルノ自由ヲ失ヒ科ス
 ルニ嚴罰ヲ以テス然レドモ未ダ圖書ノ出版ニハ此ノ自由
 ヲ奪ハレザリシ蓋シ新聞紙ニテハ世ニ流布スルヲ最モ速
 カナルモ圖書ニ於テハ世ニ流布スルヲ甚ダ遲緩ナルノ致
 ス所ナルカ此ノ時ニ當リ政府ノ針路ハ上書建白ヲ世ニ流
 布スルヲ避ケントシテ之レヲ世人ニ知ラシメザルニアレ
 バ右ノ禁止文ニ加フルニ明治十六年ニ至リテ新聞紙條例
 ヲ改正セラレタリ〔四月十六日〕此ノ條例ハ新聞紙發行ニ就
 テ頗ル困難ヲ來シタルガ如シ其第三十一條ニ曰ク
 式ニ依リ宣布セザル公文及上書建白請願書ハ當該官司

ノ許可ヲ得ルニ非ザレバ之ヲ記載スルコトヲ得ズ違フ
 者ハ二月以上二年以下ノ輕禁錮ニ處シ三拾圓以上三百
 圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 其大意ヲ錄シ若クハ草案ヲ掲載スルモ亦同シ
 政府ノ針路ハ上書建白ヲ世ニ公ケニスルヲ嚴禁シテ少
 シモ漏洩セザルニアレバ前掲ノ禁止文ニ比スルトキハ一
 倍以上ノ本刑ト爲シタルナリ〔附加刑ハ〕是ノ時ヨリシテ條
 例ニ違犯スル者多ク法衙モ嚴重ニ違犯者ヲ罰シタルモノ
 、如シ其ノ第二項ナル大意ヲ錄シ若クハ草案ヲ掲載スル
 ヲ禁ゼラレタルノ罰ニ該ル者少シトセズ政府ノ針路ハ秘
 密ヲ主トセラレタルレバ當ニ新聞紙ヘノ掲載ヲ嚴禁シテ世
 人ノ速知ヲ止メタルノミニテハ未ダ十分ナリトスベカラ

又時ニ書ニ編輯シテ出版公行スル者多キニ至リシヨリ茲
ニ政府ハ出版條例ヲ改正シテ上書建白ハ新聞紙ト同シク
圖書出版ニモ其自由ヲ奪フトハナレリ明治十六年六月
廿九日第二十一
號布

出版條例罰則第五條 凡ソ著譯ノ圖書新聞紙條例第三
十一條第三十二條第三十三條第三十四條第三十七條第
三十八條第三十九條ノ罪ヲ犯シタル者ハ著譯者出版者
共犯ヲ以テ論ジ該條例ニ依テ罰ヲ科ス但印刷器ヲ沒收
スルハ第七條第二項ノ場合ニ限ル
其大意ヲ録スルトキハ上書建白ノ本旨ヲ知ルニ足ルベキ
モノナルニモ禁止セラレタレドモ只ダ其上書建白ノ標目
ヲ載スル如キハ違犯ノ實ハアラザル可ク又々其ノ標目ニ

基キテ上書建白ノ本旨ヲ推測スル如キモ違犯ノ實ハ免
ル可キナリ彼ノ當該官司ノ許可ヲ得バ新聞紙ニ掲載シ圖
書ニ登錄スルヲ許可シト雖モ既ニ政府ノ針路ハ公布ヲ嫌
思スルニアレバ其許可ヲ得ラハハ如キハ載セテ以
テ世ヲ益スル程ノモノニハアラザル可ク勢力アル上書建
白ハ掲載ノ許可ヲ得ルニ能ハザルヲ知ル可シ宜ベナルガ
ナ其許可ヲ得テ掲載シタルモノアルトヲ知ラザルヲ
夫レ法律ハ既往ニ遡ルモノニアラズトハ法律ノ定則ニシ
テ我刑法ニテモ第三條ニ之レヲ明示シタリ故ニ上書建白
キ圖書ニ登錄シテ世ニ公ニスル如キモ明治十六年ニ出版
條例改正以前ニカ、ルモノハ既ニ世ニ公ニナリシモノナ
ルニヘ之レヲ掲グタレバトテ今更秘密ヲ掩フ譯ニハ至ラ

ズ而已ナラズ法律ハ既往ニ及バザルモノナレバ無論改正
 以前ニカ、ル上書建白ハ圖書ニ登録スルモ法律ノ問フモ
 ノニアラズト思惟セシニ豈ニ圖ラシヤ
 明治十七年十二月三十日第貳拾六號布達(左大臣内務卿
 連署)式ニ依リ宣布セザル公布及上書建白請願書ヲ記載
 セル圖書ハ明治十六年(六月)第二十一號布告以前ノ出版
 ニ係ルモノト雖再版反刻若クハ之ヲ抄出シテ出版ス
 ルモノハ新聞紙條例第三十一條ニ依ルベシ
 上書建白及政府ノ非ヲ責メタル請願等ハ世ニ公ニスル
 ヲ拒絕セラレタル極點ニマデ達シタルモノナリト謂ハザ
 ルヲ得ズ之レ即チ既ニ世ニ公ニシタルモノト雖再版トヘ

沿革ノ約言

一人ニテモ知ラシメザルヲ必要トセラレタルモノナル乎
 然ルニ此ノ嚴禁アルモ一方ニテハ臆寫シテ各相傳フルモ
 ノアリ之レヲ嚴禁スルノ特例ヲ設ケラル、トナクンバ所
 謂人ニ隱遁センタメ上半身ハ覆フモ下半身ノ露ハル、如
 キ慮ヲ免ル可カラザル可キナリ
 以上ノ沿革ヲ約言スルトキハ明治ノ初年ニ當リテハ萬機
 公論ニ決スルノ大旨ヲ以テ頻リニ上書建白ヲ促サレ内政
 外交共ニ輿論ヲ採擇セラレテ其得ル所少ナカラザリシ明
 治五六年ノ交ニ至ルマデハ大小ノ沿革ナキニハアラザレ
 ドモ政府ノ針路ハ方向ヲ轉ジタリトモ思ハレザリシニ彼
 ノ征韓ノ議内閣ニ破裂シ踵テ世上騒々ノ折柄在野ノ名士
 ガ民選議院設立ノ建白ヲ爲セシヨリ政府ノ針路ハ何トナ

六三

ク上書建白ニ制限ヲ立テント欲スルノ傾向ヲ來タシ明治八年ニ至リテハ上書建白ヲ許可ナク新聞紙ニ掲載スルヲ禁ゼラレ又々立法ニ關スル上書建白ト其他ノ上書建白トヲ別チテ其主務官ヲモ別タレ是レト共ニ上書建白人ノ不便ヲ感ゼシムルニ至レリ然ルニ明治十二三年ノ交ニ至リテハ政論民間ニ喧シク是處彼處ニ集會談論シテ政治ノ得失ヲ論シ上書建白スル者續々輩出スルヨリ政府ハ少シク茲ニ意ヲ注ガレテ終ニ單行ノ布告ヲ下シ上書建白人ニ干涉スルトトハナレリ然レドモ之レガ爲メ民間ノ論客ハ屈撓スルノ色ナク却テ激昂シテ天皇陛下ニ上願スル等ノ事アルニ至ルヨリ明治十五年請願規則ヲ制定公布シテ請願ノ權ヲ縮メタリ於是乎上書建白ノ自由ト請願ノ自由ト

六三

ニ大ニ制限ヲ立テラレ政府ノ針路ハ上書建白請願ニ意ヲ加ヘテ治安ヲ維持セント欲シ之レガ公行ハ新聞紙ニ掲載スルトヲ止メラレシノミナリシモ明治十六年ニ至リテハ圖書ニモ録シテ世ニ公ニスルトヲ嚴禁セラレ務メテ上書建白請願ノ公行ヲ防遏シタリ是等ノ事アルニモ拘ハラズ明治二十年八月九月ノ交ニハ亦々民間ノ輿論ヲ固メ續々上書建白ヲ爲スノ傾キアルヨリ終ニ内務大臣ハ省令ヲ發シ内閣總理大臣ハ地方長官ニ訓示シ頗ル嚴重ナル處分ヲ爲ストニ決シタリ予ガ沿革史ヲ編シ共ノ政府ノ針路ヲ前後比較スル斯クノ如シ今後政府ハ如何ナル針路ヲ執ラル、カ將來ノ事ハ豫想ス可カラズ只ダ其ノ輿論ノ採擇當ヲ失ハザラントヨ今日ノ政府ニ切望スルノミ

○第二編

○上書建白請願ニ關スル民間ノ動作

凡ソ一國ノ輿論ハ其國ノ隆運ヲ致シ其國ノ勢力ヲ振起ス
 可キモノニシテ苟モ國ヲ成シテ數多ノ蒼生ノ棲息スルヨ
 リハ其國ヲ成ス所ノ人民ノ輿論ヲ蔑視シ之レヲ採擇スル
 ナキトキハ何ヲ以テ其國ヲ保安スルデアランヤ之レ管
 ニ立憲政体ノ國ニ於テ然ルノミナラズ君主專制ノ國ト雖
 亦輿論ヲ採擇セザル如キコトハ決シテアル可キモノニアラ
 ザルナリ聖明叡智ノ君主アリト雖モ民望ヲ枉グ輿論ヲ顧
 ミザル如キデアラバ上下離隔シテ下ハ上ヲ怨ミ上ハ下ヲ
 奴隸視スルニ至ルヤ免ル可ラザルモノニテ終ニハ一國ノ

擾亂ヲ起シ他邦ガ其機ニ投ジテ末ハ亡國ノ悲惨ヲ來メス
 ヤ古今萬國ノ史乘ニ徴シテ歴々明カナリ然レドモ君主專
 制ノ實アル國ニ於テハ斯クノ如キテ誠ニ稀レナルモノニ
 テ亦々誠ニアル可キモノニ非ズ何トナレバ君主ト人民ト
 ハ必ズ忠愛ノ情アルモノニテ人民ハ君主ヲ父トシ君主ハ
 人民ヲ赤子ト働スノ實ハ孰レ國ニモアル可キモノナレバ
 赤子ノ望ム所ハ父ノ之レヲ呵責スルモノニアラズ父ノ命
 ズル所ハ子ノ否ムモノニアラザルユヘ雙方互ニ歩ヲ譲リ
 又情意ヲ洞通シ相熟和シテ生ヲ送ルモノナリニ至暴戻ノ
 例ヲ引クノ外何ゾ穩當ナル輿論ヲ斥ケテ人民ヲ殘虐スル
 ノ君主アラザラヤ只々恐ル君主ト人民トノ間ニ在ル所ノ有
 司ガ君主ヲ籠絡シ人民ヲ抑壓シ我意我慢ヲ張リテ私恣專

横到ラザル所ナキチ一國ノ擾亂ヲ起ス所以ノモノハ多ク
 ハ有司專制ノ弊アリテ上下ノ情意ヲ中間ナル有司ガ阻隔
 壅塞スルニ起因ス有司專制ノ弊害。豈ニ恐レザル可ケンヤ
 上下ノ情意ヲ壅塞スルノ弊害。豈ニ察セザル可ケンヤ試ニ
 世界萬國ニ革命ノ起ル原由ヲ見ヨ二三帝王ノ暴壓ヲ除ク
 ノ外ハ皆ナ有司。政ヲ執ルノ方針如何ニアルヨリスルニア
 ラズヤ又試ニ亡國ノ悲境ニ墜リシ原由ヲ見ヨ有司ハ一國
 ノ料理ヲ私シ輿論ヲ採擇スル丁ナキヨリ國勢衰ヘテ氣力
 ヲ失フタルヨリスルニアラズヤ之ヲシテ輿論ヲ採擇シ人
 民ノ望ム所ニ違フ丁ナクンバ其國治リテ亂ル、丁アルベ
 カラズ其國強クシテ他ノ凌辱ヲ受クル丁ナカル可シ輿論
 ノ採否ハ一國ノ治亂興亡ニ關ス輿論ノ勢力豈ニ熾ンナラ

ズヤ
 既ニ前編ニモ總論スル如ク幕府專横ノ時ニ當リテハ輿論
 ヲ採擇スル丁ナク務メテ上意ヲ下ニ通ゼズ下情ヲ上ニ達
 セズ人民ハ闇黒ノ中ニ棲息シ幕府ハ私意ノ欲スル所ニ任
 スヲ以テ偶々幕府ノ失墜ヲ諫メント欲スレバ死ヲ以テセ
 ズンバアラズ故ニ陽ニハ上書建白ヲ爲シテ上ヲ諫ムル者
 少ナキモ陰ニハ頗ル不平ヲ鳴シテ人皆ナ幕府ノ政下ニ在
 ルヲ忌ミ其團結ハ即チ輿論トナリテ其勢ハ幕府ヲ倒シ
 テ維新ノ大業ヲ爲スニ至リタリ其維新ハ大業ヲ爲シタル
 ハ果シ誰レノ功ナルカ之レガ輿論ハ何ニ依テ生ゼシカ予
 ハ之レヲ草莽ノ志士ガ身ヲ殺シテ國ニ盡シタルヨリセシ
 モハナリト斷言センハミ公卿諸侯其志ナキニアラズ而モ

維新ノ大業
 輿論ニテ成
 ル

草莽志士ノ喚起シテ然ルモノナリ草莽ノ志士。四方ニ奔走
 シ幕府ニ説クニ大義ノ在ル所ヲ以テシタリシモ幕府ハ頑
 乎トシテ之レヲ聞クコナク却テ嚴刑ニ處シタリシモ一人
 倒レテ二人起リ三人死シテ六人生シ民間志士ノ歎望ハ益
 益固キヲ致シ公卿諸侯モ其説ニ意ヲ同ジクスルモノアル
 ニ至リ列藩ノ續々建議スル者等アルニ至リケレバ或ル一
 二小部分ヲ除クノ外ハ王政復古ノ説ニ賛同セザルナク三
 百年來其基礎ヲ固メシ徳川政府モ其説ニ服シテ將軍慶喜
 ハ太政ヲ奉還スルトトハナリタルナリ其當時ニ在リテハ
 干戈ノ勢力ヲ以テ維新ノ業ヲ成シタル思ヒアリシモ決シ
 テ兵馬ヲ以テ王政ヲ古ニ復シタルニアラズ全ク輿論ヲ以
 テ太政ヲ奉還セシメタルニ過ギザルナリ彼ノ干戈ヲ以テ

敗リ兵馬ノ間ニ維新ノ鴻業ヲ成シタル等ノ感想アルモノハ大ナル間違ナリ其戦争ノ如キハ太政奉還ノ餘毒ノミ彼ノ山内豊信ガ後藤象次郎ヲ二條城ニ至ラシメ將軍慶喜ニ太政奉還ノ事ヲ説キシハ即チ輿論ノ所向ヲ示シ輿論ニ敵ス可カラザルトテ極論セシニアリテ實ニ其大義ノ在ル所ヲ諫言シタルニアリ將軍ハ其議ニ服シテ太政ヲ奉還シタルモノナレバ慶喜ハ輿論ノ代表者タル後藤象次郎ノ説即チ輿論ヲ納レタルモノナリ何爲ゾ彈丸矢石ノ間ニ政權ヲ抛棄セシメタリト云フコトアラシヤ慶喜ノ活眼ハ早クモ輿論ノ勢力ニ敵スベカラザルトテ知リ建議ヲ納レテ其身退キタリ輿論ノ勢力何ゾ夫レ強盛ナラズヤ若シモ慶喜ニシテ之レガ建議ヲ納ル、トナクシテ依然輿論ニ抗スルコトア

維新業成テ
一時建議ス
ルモノヲ減
ス

ラシメバ其不幸ハ決レテ徳川政府ニノミ止ルモノニハア
ラザリシヤ疑フマデモアラザルナリ
維新ノ業成ル輿論ヲ以テ幕府ヲ倒シタル其新政府ナレバ
輿論ヲ採納セラル、ノ政府ノ針路タルヤ勿論ナリ若シモ
有司專制ナル幕府ヲ倒シテ新ニ有司專制ナル明治政府ヲ
造ル如キコトアラバ是レゾ眞成ナル王政復古ニアラスシテ
二三有力者ガ政權ヲ私センタメノ革命ナリト謂ハザルヲ
得ザルナリ明治政府ハ決シテ輿論ニ抗拒スルモノニアラ
ズ輿論ノ版スル所ニ從ハント欲シ輿論ヲ採擇センコトヲ之
レカム然レドモ國民ハ輿論ヲ以テ造リタル新政府ノコトナ
レバ一望ヲ達シテ一休憩ヲ爲スノ人情ニテ或ル小部分ナ
ル佐幕論者ノ外ハ政治上ニ關シテ著シキ建議ヲナスコトナ

シ故ニ政府ハ輿論ノ在ル所ヲ窺ヒ知ル可カラズ然ルトキ
 ハ折角輿論ヲ採ルノ針路ヲ誤ルトナキヤヲ慮ラレ彼ノ待
 詔局ヲ置キテ人民ヲシテ上書建白セシメンテヲ獎勵勸誘
 セラレシモ著シキ効顯アルコトナカリシ彼ノ大久保利通ノ
 遷都ノ建議ニ於ケル〔明治元年〕島津忠義、毛利敬親、鍋島直大、山内
 豐範等ノ諸侯連署シテ封土人民ヲ奉還センテヲ請願セシ
 ニ於ケル〔明治二年正月廿日〕山内豐範ガ士族文武ノ常職ヲ解キ祿制
 ヲ廢シテ祿券ヲ給シ官員兵隊ハ廣ク之ヲ士民ニ取リ且ツ
 族類ヲ分テ士卒平民三等ト爲シ戶籍法ヲ設ケントノ上奏
 ニ於ケル〔三年十一月十七日〕散髮廢刀ヲ許スノ建議ニ於ケル穢多非
 人等ノ稱ヲ廢シテ悉ク民籍ニ編シ地租蠲免ノ制ヲ罷ムル
 ノ建議ニ於ケル〔四年八月二日〕奴婢娼妓等ノ年期ヲ限り人身

賣買ニ類似スル者ハ悉ク之ヲ解放シ凡ソ雇使必ス一年ヲ
 限ル可シトノ建議ニ於ケル〔五年十月二日〕陸奥宗光ガ全國ノ地
 租ヲ改正シ舊法ヲ廢シ新ニ地券ヲ設ケ本價百分ノ三ヲ以
 テ租ト爲サントノ建議ニ於ケル〔六年七月廿八日〕明治元年ヨリ
 明治六年ニ至ル著シキ上書建議ニシテ遷都ノ議ハ終ニ東
 京ニ遷ララル、トトナリ封土人民奉還ノ上願ハ其廿四日ニ
 請ヲ決裁スルコトヲ令セラレ其局明治四年七月十四日廢藩
 置縣ノ降詔アルニ至レリ士ノ常職ヲ解クノ建議ハ明治五
 年十二月朔日ニ至リテ徵兵令ノ頒布トナリ皆ナ是レ行ハ
 レシ上書建議ナリト雖ドモ是レヲ決シテ輿論ヲ採納
 シタルモノナリトハ云フ可カラズ只ダ少シク勢力アル有
 司ノ爲セシ建議ニ止リ其ノ著シキモノハ多クハ卻ケラル

ルナク採納セラレタリシニ明治六年ニ至リ大藏大輔井上馨、大藏省三等出仕澁澤榮一が歳計ノ當ヲ得ズシテ財政其宜シキヲ得ザルナリ上書シ職ヲ辭シタルノ一事コソ其五月十八日ニ於テ書ヲ卻ケラレ六月九日ヲ以テ大藏省事務總裁大隈重信ガ該上書ノ誤謬アルヲ説明シ歳出入豫算表ヲ頒布スルニ至リタリ蓋シ政府ノ失墜ヲ世ニ公ニシタルヨリ起リシモノナルカ然レドモ大藏省ノ長官ト次官ガ取調ヲ爲シテ上書セシモノガ斯クモ甚ダシキ相違アルトハ當時人皆ナ怪マザル者ハナカリシ政府ハ上書建白ヲ人民ニ促スト雖モ人民ノ上書建白ヲ爲スモノ甚ダ少ナク偶マナキニハアラザレドモ事ノ鎖細ニ涉リテ探テ論ズベキ程ノモノハナガリシニ明治三年ニ在

横山正太郎ノ諫死

リテ只ク一人ノ熱心ニ政事ノ得失ヲ上陳シタルモノアリタリシ即チ其七月二十七日鹿兒島藩士横山正太郎ナリ者集議院ニ投疏シ時弊十條ト征韓ノ非ナルトヲ陳辨シ直チニ自刃シテ死セリ其ノ說ノ可否得失ハ姑ク閑キ其國事ヲ想フノ熱情終ニ死ヲ以テ諫陳シタルハ誠ニ感賞スベキモノナリ當時朝廷ハ上書建白ヲ促サル、ノ際ナルヲ以テ大ニ横山ノ忠諫死ヲ以テスル祭悼マセラレ祭資料金百兩ヲ賜フニ至リタリ斯ル忠君愛國ノ士アリ朝廷モ決シテ之レヲ忌避セラル、ヲナク追悼サル、ノ有様ナリシニ之レガ爲メ他ニ感覺ヲ起サシムルヲナカリシハ亦タ以テ國民ガ姑息儉安ニ墜リシヲ知ルニ足ル可シ後年ニ至リ小原彌惣八赤澤常容ノ如キアルモ却テ政府ノ尤ムル所トナル以テ

明治三年ノ政府ハ輿論公議ヲ執ルノ切ナリシコトヲ知ル
ニ足ルベシ
茲ニ政府ニ建白シテ大ニ刺衝ヲ與ヘ僅々ノ紙葉ハ日本ノ
輿論ヲ出ス種子トナリタルモノハ實ニ民選議院設立ノ建
白ニゾアル維新以來民間ニ政事思想ヲ有スルモノトテハ
殆ンド皆無ト謂フモ可ナル如キ有様ナリシニ一度ビ民選
議院設立ノ建白書ガ日新眞事誌ニ出ルヤ今迄匿リタリ
人々モ俄カニ起チテ政事思想ヲ懷キ民選議院ノ是非得失
ヲ痛論スル者ヲ輩出スルトハナリタリ此ノ建白コソ明
治ノ新政事社會ヲ造出シタルモノナリト稱スルモ決シテ
過賞ニハアヲザルベシト信ズルナリ夫レ明治六年ニ當リ
征韓論ノ是非廟堂ニ分ル、ヤ其ノ是トスル論者陸軍大將

兼參議西鄉隆盛、參議副島種臣、後藤象次郎、板垣退助、江藤新
平ノ五名ハ皆ナ職ヲ辭シ薩土ヨリ出デタル近衛兵モ種々
名義ヲ構ヘテ皆ナ其故國ニ歸リヌレバ朝野騷然トシテ亦
タ口ニ征韓ノ論ト五參議ノ辭職トヲ説カザルモノナキニ
至リ少シク識アルモノハ辭職ヒシ五參議ハ今後如何ノ事
ヲ爲スヤラント陰カニ窺フモノアルニ至リシヨリ其ノ前
ノ五參議ノ名聲ハ頓ニ全國ニ響キ一舉一動人ノ注目スル
所トハナリシナリ之レ民選議院設立ノ建議ガ一時ニ傳播
シテ國民ニ政事思想ヲ起サシメタル原因ナリトス時ニ明
治七年一月十日ナリシ此ノ建白ノ世ニ公ニナルヤ先ヅ加
藤弘之等ノ徒ハ民撰議院ハ未ダ今日ノ日本ニ適スルモノ
ニアラズ素ヨリ早晚カ其設立アル可キハ望ム所ナレドモ

尙ホ早シトノ説ヲ主唱セシヨリ或ハ之レヲ駁シ或ハ之レヲ賛成シ一時ハ新聞紙上ノ一問題トナリシヲ以テ加藤弘之ノ尙早論モ爲メニ幾分々民選議院ノ何物タルコトヲ世ニ知ラシメタルノ一助トモナリシヤ知ル可シ抑モ明治七年ノ當初ニアリテ人民ノ未ダ民選議院ノ何物タルト國會ノ文字ヲ見聞シタルコトモナキトノ時ニアリテ突然民選議院設立ノ建白ヲ爲ス如キハ人、奇異ノ思ヒヲ爲スモノアリシナラント雖モ只ダ其ノ文字ノ新シキニ過ギズシテ其事々ルヤ決シテ突然ニ發シタルモノナリトハ謂フ可カラザルナリ公議輿論ヲ採ルノ急ナルコトハ明治ノ初年以降ニ天皇ノ降詔セラレタルモノト政府ノ公布セラレタルモノトヲ見テモ知ルニ易シ共公議輿論ヲ採ルトハ即チ國會ヲ開

設シテ代議士ノ公論ニ決スルニアルモノナリ民選議院設立ノ建白ハ 聖詔ノ實行ヲ速カナラシメ或ル弊害ヲ除カントノ趣旨ニアルモノニシテ決シテ一新事業ノ興起ヲ望ミタルモノニアラズ然ルニ人々之レニ奇異ノ思ヲ爲スノミナラズ政府亦々之レヲ採納セラレザリシハ何ニ依テ然リシ乎既ニ政府ハ公議輿論ノ採擇ヲ急ガレ敢テ之ヲ促サレタリシ針路モ茲ニ至リテ公議輿論ノ採擇ハ尙早シトノ針路ニ轉セラレタルヤ明カナリ其民選議院設立ノ建白ハ採納セラレズト雖也前ニモ論ズル如ク此ノ建白ノ爲メ民間ニ政事思想ヲ喚起セシメタルハ其功蓋シ妙少ニハアラザルナリ

民選議院設立ノ建白ハ採納セラレズ然レドモ是レガタメ

政治ノ方針ヲ動カサズトハ謂フ可ラズ明治六年ニ其職ヲ
辭シタリシ板垣退助ハ八年三月ニ參議ニ復シ其四月十四
日ニ左院右院ヲ廢シテ元老院大審院ヲ置カレ聊カ以テ立
法ノ源ヲ廣メラレ地方官會議ヲ興シ漸ニ立憲ノ政体ヲ立
テントノ詔ヲ發セラレタルモノハ實ニ明治七年ノ建白干
リテカアリト謂フ可シ然ルニ左大臣島津久光參議板垣退
助ハ尙ホ其ノ時弊ヲ救濟ス可カラザルヲ知リ板垣ノ如
キハ復職僅カニ二百二十日、明治八年十月二十七日共ニ職
ヲ辭シタリ蓋シ其ノ意ハ參議ニシテ各省卿ヲ兼任スル其
弊少ナカラザルヲ以テ内閣ヲ分離センコトヲ主トセシモノ
ナリト聞ク然ルニ當時朝鮮江華灣ノ警報達スルヲ以テ此
ノ事件ノ結局ヲ待テ以テ建議ノ採否ヲ決セントス板垣ハ

民選議院設
立ノ興望

固ク執テ建議ヲ決スルノ遲緩ナルヲ不可トシ島津亦々太
政大臣ヲ黜免セシコトヲ主唱ス依テ天皇ノ親裁ヲ請ヒシニ
内閣分離說モ行ハレズ太政大臣黜免ノコトモ採納セラレザ
ルヲ以テ共ニ冠ヲ掛ケタリト云フ予ハ其是非得失ハ姑ク
言ハズ然レドモ内閣ノ分離ハ明治十三年ニ至リ終ニ行ハ
レタリ
民選議院設立ノ說ノ明治七年ニ起ルヤ世ニ少シク識アル
者ハ國會即チ民選議院設立ノ不可ヲ唱フル者ナク只タ其
緩急ヲ爭フニ過ギザリシ然レドモ其ノ尙ホ早シトノ說ハ
多ク有司ノ唱フル所ニシテ民間ニテハ一日モ早ク其設立
ヲ渴望セザルハナク尙ホ早シトノ說ハ政府ノ主義ニテ設
立ヲ急グハ民間有識ノ主義ナリト云フモ不可ナキモハ、

立憲社及靜
儉社建白

如シ凡ソ浮沈ハ事物ノ常ニシテ一度ニ興リテ復タ衰フル
 モノナルニ國會開設ノ説ノ如キハ年月ヲ經過スルニ從フ
 テ益々熾盛トナリ以テ今日ニ至リシナリ明治十年五月高
 知ノ立志社ハ片岡健吉ヲ總代トシテ西京ノ行在所ニ至ラ
 シメ時弊ノ矯正ヲ建白セリ其ノ言フ所ハ公議ヲ擴張スル
 一ヲ望ム事、施政ノ順序ヲ誤ル事、立法行政司法ノ三大權未
 ダ固タカラザル事、士族ノ處置當ヲ得ザル事、徵兵ノ事、地租
 改正ニ關スル事、條約改正ノ事、朝鮮ノ事、臺灣ノ事、樺太千島
 交換ノ事等ニシテ結局國會ヲ開キ憲法ヲ制定スベシトノ
 意ニアリシト是レト、同時ニ高知ノ靜儉社モ賢ヲ擧ゲテ朝
 廷ヲ正シ以テ人心ヲ収ム可レトノ旨ヲ建白シタリト云フ
 蓋シ立志社ハ民權擴張ヲ主トセシモノニシテ靜儉社ハ封

國會ヲ開設
スル允可ヲ
上願スル書

建ヲ主義トシ新説ヲ欲バザルモノナレバ兩社ハ氷炭相容
 レザルモノナルベキニ斯ク一時ニ政府ニ建白スルニ至リ
 シハ實ニ偶然ナリト云フ可シ或ハ之レ時勢ノ然ラシムル
 モノナルカ此ノ建白ハ採納セラレズ其採納セラレザルハ
 當時ノ政治ノ針路ニ於テ決シテ怪ムニ足ラズ然レモ亦
 民選議院設立ノ建白ニ踵テ大ニ輿望ヲ固メタルノ勢力ア
 リシヲ知ルニ足ル可シ爾來立志社ガ首トシテ愛國社ナル
 モノヲ東京ニ設ケ全國ノ同士ト結合スル等ノ事アリテ世
 ニ民權ノ擴張ヲ論シ自由ノ説ヲ爲シ國會開設ノ必要ヲ議
 スル者頗ル多キヲ致シ其民權自由國會ノ何物タルヲ知ラ
 ザル者ニ至ルマデ口ヲ極メテ民權自由ノ説ヲ吐クニ至リ
 シハ氣運ノ向フ所ナルベキカ明治十三年三月國會期成同

盟會ナルモノヲ大坂ニ開ク各地ヨリ總代トシテ會スル者九十有餘名、惣人員八萬有餘名ニ垂レントス其議決ヲ以テ福島縣河野廣伸、高知縣片岡健吉ヲ奉呈委員トナシ總代等連署シテ國會ヲ開設スル允可ヲ上願スル書ヲ政府ニ奉呈シタリ于時十三年四月ナリ此ノ建白ハ頗ル衆人ノ注目スル所ニシテ政府亦々默過シ去ルニ至ラズ斯クノ如キ建白ヲシテ續々奉呈スルニ至ルトキハ度ヲ重ヌル毎ニ願望者ノ數ヲ増シ政府其處分ニ苦シムノ慮リナキニアラズ故ニ集會條例十三年四月第十號布告第一ヲ制定公布シテ集會ニ制限ヲ加ヘ其十二月ニ於テハ上書建白ニ關スル單行ノ法律ヲ公布セラレタリ然レドモ是レガタメ人民ハ少シモ屈スルノ色ナケレドモ大ニ集會ノ自由ヲ失ヒ建白ノ不便ヲ感シタル者

上書建白ノ効

少ナシトセズ明治十四年十月自由黨ノ組織アリ踵テ立憲帝政黨、立憲改進黨等ノ設ケアリテ各機關ノ新聞ヲ發行シ或ハ演說講談等ヲ爲スモ著シキ成績アラザリシナリ只ダ民間政事思想ノ衰ヘズシテ益々高尚ヲ帶ビタルハ誠ニ賀ス可キノ至リナリシ

斯ク人民ヨリシテ屢々上書建白ヲ爲スト雖ヒ採納セラル、コトナカリシモ亦々其効ナシトハ謂フ可カラズ彼ノ明治八年元老大審二院ヲ置キ地方官會議ヲ開クノ聖詔ニ於ケル明治十一年府縣會ヲ開設スベキヲ布告セラレタルニ於ケル明治十四年國會開設ノ聖詔アルニ於ケル皆ナ之レ日本國民ノ歸向ヲ酌マレタルモノナラハ一方ニテ言論集會ノ不自由ヲ與ヘ上書建白ノ不便ヲ感ゼシムルノ政略

十年ノ減租

ヲ取ラレシモ一方ニテハ輿論ニ敵ス可カラザルヲ察シテ
 輿論ノ幾分ヲ納ル、トトナレリ輿論ノ勢力ハ實ニ著シキ
 モノナレバ寧ロ輿論ヲ出スト能ハザルノ政略ヲ取ルコソ
 當時政府ノ針路ナリシト知ルトヲ得ベキナリ
 初メ明治六年ニ地租改正ノ令ヲ布カレ地價百分ノ三ヲ以
 テ地租ト定メラル、ヤ此ノ改正ノ爲メニ莫大ノ費用ヲ要
 シ農民ノ困苦言フ可カラザルヲ以テ或ハ歎願シ或ハ哀訴
 スルモ納レラル、トナク終ニハ竹槍席旗ノ一揆ヲ各地ニ
 見ルニ至リシヨリ明治十年一月ニ至リ詔シテ地租ヲ百分
 ノ二分五厘トシ田方ニ限リ地租半額ノ米納ヲ許ストトナ
 リタリ蓋シ六年ニ公布セラレシ地租改正條例第六章ナル
 終ニハ地租ヲ百分ノ一ニマデ減ズルトノ約束ニ起因セシ

一身ヲ犠牲
トナシテ上
書建白哀訴
セシモノ

モノナラン
 一身ヲ犠牲トナシテ國家ヲ救済シ又ハ數人ヲ援クル等ノ
 事ハ幕府ノ政下ニテハ少ナカラズシテ亦々斯クスルト大
 クンバ上書建白哀訴歎願ヲ爲スト能ハザレバナリ明治政
 府ハ輿論ヲ斥クルモノニアラズ而モ身ヲ殺シテ政府ニ促
 ルノ力ハ決シテ微弱ナルモノニアラザルナリ鳥ノ將ニ死
 ナントス其ノ啼クヤ悲シト誠ニ宜ベナル哉明治三年横山
 正太郎ノ集議院ニ於テ屠腹セシ如キ（事ハ前出ス）明治六年青森
 縣士橋爪某ナルモノ國債ノ嵩ムヲ憂ヘ之レヲ償却センタ
 メ全國人民ヨリ分頭金（一人十六錢）ヲ募リ外債ヲ皆無ト爲
 サントヲ建白セシモ其策行ハレザリシ愛國ノ熱心禁ズベ
 カラザルノ衷情ヨリ起リシ建白ナリシモ其策ハ當時ニ行

ハルベキモノナリトモ思ハザリレナリ明治六年ヨリ酒田
 縣民ノ縣官ノ抑壓ニ苦ム甚ダシキヨリ屢々政府ニ告訴シ
 タレドモ用ヒラレズ參事松平親懷ハ却テ縣民百數人ヲ獄
 ニ下スニ至リシヨリ同縣平民森藤右衛門ナル者己レノ財
 産ヲ抛チ身ヲ殺シテ千辛萬苦ノ間ニ縣民ノ困難ト縣官ノ
 不當トヲ縣民ニ代リテ政府ニ上書シタリ藤右衛門ノ鐵心
 何ゾ貫徹セザランヤ八年ニ至リ政府ハ元老院權大書記官
 沼間守一ヲ縣地ニ遣リテ事實ヲ推問セシム偶々元老院ノ
 職制ヲ改正セラレタルガ爲メ司法省ヨリ判事兒島惟謙ヲ
 代テ其地ニ至ラシメ〔明治九年〕審理ノ末原告請求金貳拾萬圓ノ
 内六萬三千餘圓ヲ縣廳ヨリ人民ニ償還セシメ參事松平親
 懷ヲ懲役一年ニ處シタリ〔明治十年〕若シモ藤右衛門ノ奮發茲

ニ至ルナクンバ酒田縣民ハ不幸ノ儘ニ過ギ不正ナル參
 事モ罪ヲ得ルナキニ至ル可カリシニ罪惡ヲ罰シ理ヲ貫
 クノ裁判ヲ下サレ酒田縣民ノ幸福ヲ得タルハ藤右衛門一
 人ノカナリト謂フベシ亦々明治ノ義民ナリ
 明治十二三年ノ間ハ政論ノ喧々々々時ニシテ幼童婦女子
 モ口ニ民權國會ナドノ文字ヲ唱スルニ至リケレバ紀律嚴
 肅ナル軍人ト雖ドモ亦々之レニ感染セズト云フ可カラズ
 明治十二年近衛歩兵伍長ニテ小原彌總八ナル者時事ニ感
 慨スル所アルモ軍人トシテ之レヲ論辨スルヲ能ハズ之レ
 ヲ上奏センカ身卑賤ニシテ果タスト能ハズ胸間ノ鬱悒ト
 忠君愛國ノ熱情トハ禁ゼント欲スルモ能ハズ寧ロ死シテ
 己レノ意見ヲ上奏スルノ便ヲ求ムルニ如カズト決レ皇居

ノ門前ニ於テ腹ヲ屠シ將ニ死セントス時ニ衛兵ノ知ル所トナリ身ヲ傷スルノミニレテ死ヲ果サズ終ニ縲紲ノ身トナリ軍律ニ照シテ刑ニ處セヲレタリト云フ其ノ彌惣八ガ懷ニセシト云フ上奏書ハ如何ナルモノナリシカ誰レモ親ヒ知ル可カラズト雖ドモ蓋シ國會開設ヲ急務ナリトスルノ意見ナリシト云フ彌惣八ノ如キハ其熱情憐ム可ク其意切ナリシハ誠ニ賞スベキモ嚴肅ナル紀律ノ範圍内ニ在ル軍人ニシテ終ニ軍律ヲ犯スニ至リシハ亦タ惜ム可キノ至リナリ十二年三月越後ノ人赤澤常容ナル者時事ニ感シテ慷慨悲憤ノ情念ヲ起シ東京ニ到リテ頻リニ太政官ノ門ヲ叩キレモ己レノ意見ヲ口陳スルノ運ニ至ラズ心鬱シテ身ヲ安ンズルヲ能ハズ終ニ死ヲ決シテ建白書ト依頼書トヲ

明治十四年
以後

在東京ノ某ニ送り自刃セントセシヲ旅館ノ主人ノ知ル所トナリ終ニ遂ルヲ能ハズ親族等ニ擁セラレテ國ニ皈リシト云フ其舉動ハ拙ニ出ヅルモ其衷情ハ亦タ憐ムベキモノアリト謂フベシ
明治十三年國會期成同盟員ガ上書セシ前後ハ上書建白ヲナス者頻々跡ヲ絶タズ日々太政官又ハ元老院ニ到ルモノ引モ切レズ或ハ官吏ニ面謁シテ赤心ヲ吐露スルアリ或ハ門衛ニ拒マレテ空シク歸ル者アリ或ハ官吏ト爭論スルモノアリ爲メニ頗ル騒然タリシガ政府ハ一方ニテ上書建白ノ制限ヲ與ヘラレタルト十四年ニ國會開設ノ大詔アリシトニテ大ニ論者ヲ減ズルコトナリ集會條例ノ嚴密ト新聞紙條例出版條例ノ緻悉トニヨリ次第ニ言論自由ノ區域ヲ

狄メタルヲ以テ今ハ二十三年ノ國會開設ヲ待ツニ如カズ
 ト默シテ言ハザル者アリ條例ヲ濳リテ筆ニ添ノ口ニ演ス
 ル者アリト雖ドモ要スルニ言論ハ大ニ衰ヘテ所志ヲ腕力
 ニ訴ヘント欲スル者アルニ至リタリ故ニ此ノ五六年ノ間
 ハ言論ノ時ニアラズシテ寧ロ腕力ノ時ナリト云フヲ得ベ
 キカ予ハ幕府ノ末路ニ當リテ各地ニ旗ヲ揚ゲ亂ヲ起シタ
 ル時ヲ回顧シテ坐ロニ戰慄スル外ナカリシナリ
 政論熾盛トナリ政黨ヲ組織シテ以來ハ互ニ主義ヲ以テ説
 ヲ爲シ反對論者ヲ駁撃スルハ素ヨリ免ルベキモノニアラ
 ズ自由黨員ノ中ニハ時ニ疎暴ノ者ナキニアラズ福島事件
 ノ如キ秩父暴動ノ如キ加波山一件ノ如キ名古屋一件ノ如
 キ大坂國事犯ノ如キ舊自由黨員ノ之レニ加リアリシト都

亦タ言論ノ
 世トナル

テ舊自由黨員ハ平素活潑ナルトヲ以テ他ノ黨ヨリ蛇蝎視
 セラル、モノハ亦々舊自由黨員ノ迷惑ナリ斯ク三黨派ハ
 相互ニ他ノ黨派ヲ敵視シ主義上ノ爭論絶ユルヲナカリシ
 ニ明治十八九年ノ交リヨリシテ外交上ニ關シテ何トナク
 全國人民ノ意向ヲ同シクスルノ有様ヲ出シタリシニ折柄
 十九年ノ八月ニ至リ長崎ニ於ケル清國水兵ノ暴動アリ全
 國人民清兵ノ暴舉ヲ憤ラザルハナク其談判ノ如何ニ局ヲ
 結ブカヲ待ツノミナリシ然ルニ其九月ニ至リ英國汽船「ノ
 ルマントン」號ノ紀州沖ニテ沈没シ日本人民二十五名が殘
 刻ノ死ヲ遂ゲタルヨリ同愛ノ情頓ニ起リ殊ニ英國領事裁
 判ノ不當ナルヲ憤ルノ聲ハ全國到ル所トシテ發セザルハ
 ナク實ニ日本ノ輿論ヲ固メ外交上ニ關シテ日本人ガ愛國

心ヲ勃起シタルハ此ノ頃ヨリセシモノナラン
長崎ニ於ケル清國水兵暴動事件ハ明治二十年一月ニ至リ
落着シタリシニ其人民ノ意表外ニ出デタルヲ以テ多少不
平ヲ鳴スモノナキニアラズ加之大坂國事犯一件ノ公判ヲ
開廷セラレシヨリ何トナク人氣ノ引立チタル勢アルニ際
シ板垣退助ノ伯爵ヲ辭セシヨリ又々朝野ノ一問題トナリ
或ハ賞シ或ハ駁スルノ折柄農商務大臣谷干城ハ歐洲ヨリ
歸朝シ間モナク職ヲ辭シ踵テ條約改正會議ノ中止トナル
等ノ事アリテ政事社會ハ俄カニ運動ヲ始ムルトトナレリ
然レドモ未ダ世上ニ其ノ詳細ナルヲ知ル者ナク條約改
正會議中止ノ如キハ却テ非ナルトヲ論ズル者アルニ至レ
リ蓋シ條約改正ハ國民ノ多年熱望セシ所ニシテ十九年開

會以來ハ如何ナル決議ニ至リシヤヲ知ル者ハナカリシモ
期限後十五年ヲ經シ今日ニ開會シタルモノナレバ一モ我
ニ不利益ノ事ノアル可キ筈ナク必ズヤ我ノ要求ハ悉ク納
レテ決議ニ至ルベシト思フノ他ハアラザリシヨリ俄然ノ
中止ハ頗ル人心ヲ動カスニ至レリ豈ニ圖ランヤ今ヨリシ
テ之レヲ考フレバ其中止ハ甚ダ必要ニシテ却テ我國ノ幸
福ヲ招クノ基トナリタトハ何ゾ夫レ意外モ甚ダシキ茲ニ
至レルヤ外交ノ秘密ハ時トノ斯クノ如ク人民ニ意外ノ感
想ヲ懷カシムルモ亦タ宜ベナリト謂フ可シ
上書建白ハ新聞紙ニ登録ス可カラズ圖書ニ掲ゲテ出版ス
可カラズ若シ犯ス者アレバ之レヲ罰スルニ禁錮罰金ヲ以
テス故ニ其詳細ナルト大意ナルトヲ問ハズ實ニ世間ニ流

布セザレバ只々某ガ何ヲ建白シタリトノ事ヲ知ルニ過ギ
 ガルノミ然ルニ今哉上書建白ノ類騰寫シテ世間ニ流布ス
 ルモノ甚ダ多シ之レ好事者ガ推量構造シタルモノニ出デ
 タルカ將々又々孰レヨリカ真ハ上書建白書ヲ剽竊シテ頒
 チタルモノナルカ一方ヲ防ギテ一方ニ出ツ治者ノ計略亦
 タ難イ哉明治二十年五月伯爵勝安芳ハ時弊二十一ヶ條ヲ
 掲ゲテ之レガ矯正改良ヲ爲サンコトヲ内閣ニ建白ス文簡ニ
 シテ意ヲ盡サズト雖モ皆ナ當時急務ノ事柄ノミニ屬スト
 云フ外交上ノ事ハ六月御雇法律顧問佛國人セ、ホアソナ
 「ハ内閣某大臣ノ命ヲ承ケテ條約改正ノ部分タル裁判權
 條約ノ草案ニ關スル意見ヲ捧ゲタリ其文綿密ニシテ其意
 頗ル切ニ日本ノ國權上頗ル盡シタルモノナリト云フ次ニ

農商務大臣谷干城ハ一篇ノ意見書ヲ作り之レヲ情實ノ弊
 内閣ノ弊、輕佻ノ弊、外交ノ弊、行政ノ弊、儉勤、立憲政体ノ七項
 ニ分チ之レニ總論ヲ加ヘ慷慨悲愴ノ文字ヲ以テ内閣ニ出
 シタルニ其說納レラズ終ニ職ヲ辭シタリ伯爵板垣退助
 亦々八月ヲ以テ意見書ヲ作り政府ガ人民ヲ御スルノ非道
 ト政略ノ方針ヲ矯メシメントトヲ天皇陛下ニ上奏セリ然
 ルニ此ノ書ハ十月ニ至リ事實ニ相違ノ廉妙ナカラズトテ
 卻下サレタリト聞ク九月元老院議官尾崎三郎ハ憲法ヲ元
 老院ニ議セシメラレントノ建議ヲ爲セシモ終ニ廢案ニ飯
 シ元老院議官鳥尾小彌太ハ元老院ノ議權ヲ擴張セントノ
 建議ヲ爲シタリト云フ又々陸軍中將三浦梧樓ハ兵制改革
 ノ建白ヲ爲セシトノ說アリ高知ノ林有造ハ時弊ヲ痛論シ

タル建白ヲ呈シ北米合衆國在留日本人數名ハ十月十日ヲ以テ言論集會ノ自由ヲ許サンコトヲ論ジテ天皇陛下ニ上書スルニ至ル

夫レ右ニ竝列スル如ク有力者ノ上書建白ヲ爲スモノ五六
月ノ交リヨリ續々輩出シ爲メニ全國ノ民心ヲ動カシタル
ト容易ソトニアラズ人民ハ租税ノ減額、政府ノ勤儉、言論集
會ノ自由、外交政策ノ如何等ハ今日ノ急務ニシテ一日モ忽
ニス可カラザルコトヲ感ジ今迄ハ黨派相軋リテ互ニ誹譏攻
撃セシモノモ今ハ皆ナ其意ヲ一ニシ以テ政府ニ建白セン
ト欲スルノ意氣ヲ相投ズルニ至レリ其運動措置ニ至リテ
ハ各少異ナキニアラザレドモ趣意ニ於テハ實ニ大同ナル
ノニ民間ニ於テ政治思想ヲ懷ク者多クシテ而モ熱心ニ且

ツ協カヌル今日ノ如キハ實ニ未曾有ノ事ナリト謂フベシ
現ニ予ニ明治二十年十一月九日ニ筆ヲ擱クノ日ニ至ルマ
テ既ニ建白書ヲ捧呈シタルハ其幾十通ナルヲ知ル可カラ
ズ果シ今日ノ如クセバ本年ヲ出デズシテ數千通ノ建白書
ハ元老院ノ机上ニ積堆スルニ至ルベキヤ必矣嗚呼之レヲ
何トカ評セン日本ノ輿論ハ今茲ニ定リタリト謂フベキカ
其當否ハ予ノ評下スベキ限リニアラザルナリ

天下ノ形勢斯クノ如クシテ智愚賢不肖ノ別ナク争フテ建
白セントスル者アルニ至ルヨリ中ニハ大臣ノ門ヲ叩キテ
喧噪スル者アリ又々論ズ可カラザルコトヲ論ジテ政府ヲ攻
撃スル者等アルニ至ルモ勢ノ免ル可キモノニアラザレバ
政府ハ大ニ茲ニ注目シ二十年九月ヲ以テ地方長官ヲ召集

ノ内閣總理大臣ヨリ訓示スル所アリ〔第一編ニ全〕踵テ各控
訴院檢察長ヲ召シ鎮臺司令官ヲ召シタル等モ亦々之ニ外
ナラズト聞ク又々内務大臣ハ省令第二號ヲ發レテ上書建
白ヲ戒メタリ然レドモ是等ノ訓示省令ハ未ダ十分ニ効ヲ
奏シタルヲ見ズ増々人心ハ政治ノ改良ニ傾キ總代ヲ各地
ヨリ東京ニ出ス等所謂祝融氏ノ風伯ニ於ケル有様ナリキ
後日訓示省令ノ如何ナル効ヲ奏スルカ政府ガ上書建白者
ヲ遇スル那邊ニ至ル可キカ人民果シテ倦ムコトナク進シテ
止マザルノ氣力ヲ失ハザルカ予ハ今日ヨリ豫想シ能ハザル
ナリ指ヲ屈スレバ二年ヲ出デテ明治二十三年國會開設ノ
曉ニ至ルマデ官民ノ關係ハ果シテ那邊ニ至リテ止ルベキ乎
明治二十年十一月三十日出版製本

明治二十年十一月三十日出版製本

明治二十年十一月廿一日版權免許
明治二十年十一月三十日出版製本

定價金三拾五錢

著者兼 廣島縣士族 戸田 十

廣島縣廣島區國泰寺町
百五十番地寄留

大分縣士族

出版人 下司 盛吾

東京府京橋區瀧山町拾
貳番地寄留

東京府士族

發兌人 神戸甲子次

東京府京橋區南紺屋町
七番地



2000



1735



3100

150

150



0

028398-000-1

312.1-To364m

明治建白沿革史

戸田 十畝/著

M20

BAA-0917



312.1
To364m
II